川柳雑誌

入門も
奥義も
「川柳雑誌」から

麻生路郎☆主宰

12月号

Pensoj flugas trans la land-limon

THE SENRYU ZASSHI

No. 367

昭和十三年七月一日第三種郵便物認可
昭和十二年十二月一日発行第十二卷第十二号
（毎月一回一日発行）創刊大正十三年・通巻三百六十七号

社誌雑柳川

忘年柳川大会

いよいよ一九五七年のさよなら句会です。
川雑の顔見世です。一人残らずご出席ください。

日時 十二月八日（日）午後一時
場所 光明寺（電話㈦九二六〇）
大阪市天王寺区下寺町二丁目バス停前
（市電下寺町又は日本橋三丁目下車）

司会 黒川紫香
挨拶 西尾栞

兼題
「日本間」（二句） 麻生葭乃選
「食卓」（三句） 中島生々庵選
「苦笑」（三句） 須崎豆秋選
「大入」（三句） 正本水客選

席題 三題（当日発表）
柳話 川村好郎
支部対抗句戦 各支部選手
雪月花句戦 出席者全員
呈賞 ★各題天・地・人・五客、★葭乃選天位に不朽洞賞
★支部対抗句戦優勝者、準優勝者及雪月花句戦一位の組に川雑賞
余興 記念撮影
会費 六十円、（投句のみの方は十二月六日着便、三十円切手同封本社宛）

幹事 紫香・いさむ・与呂志・東洋男・賀峰・一飄・薫風子・雄声・潮花・愛論・月都・晃・杜的・水堂・無鬼・白水・凡九郎・淡舟・清子・梅里・操子・十悟・季賛・一三夫

★忘年懇親小宴——閉会後、同会場に於て 会費 三百円

川柳雑誌社句会部
電・住吉㈥七〇八一

お正月の本社句会は

兼題一
「犬」
「もの好き」
「ゆめ」
「古手」

★投句のみの方は郵券三十円同封のこと（〆切毎月五日）

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地
川柳雑誌社句会部
電話住吉㈥七〇八一番

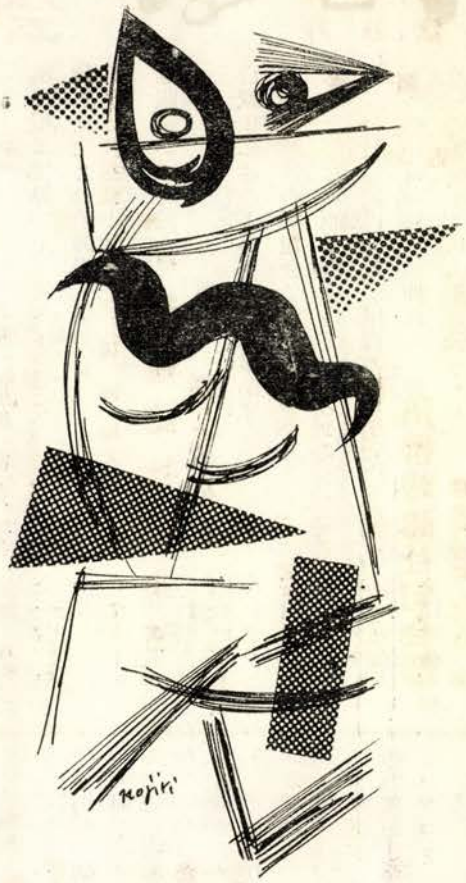
日本盛酒坊

東京八重洲口名店街・大阪千日前歌舞伎座南角

灘の清酒 ニホンサカリ

和やかに まず一杯

一九五七年を送るの辞



岸首相が三悪追放を叫ばれたが、
貧乏は何処までも続き
暴力はびくともしない
汚職はいまだに氷山の一角
と、いうありさま。

こんな世相の中で、我等は貧者の
一燈の如く、文化のともしびをとぼし続け
て来た。
顧みて悔いなき一年であった。

——路郎

12月号目次

題字……麻生路郎
表紙……野尻弘
一九五七年を送るの辞……麻生路郎……(三)
川柳家の二十四時
布部幸男・森脇幽香里……(三)
前山北海……(三)
上には上下には下……北川春巣……(二)
円空と柳眼……東野大八……(九)
座談会こぼれ話……正本水客……(一六)
川柳文学の再検討……田中辰二……(一〇)
忘れさせない……伊達瑕子……(九)
没句の中から……麻生路郎……(一二)
雑話二題……木村十悟……(一〇)
あなたの家から……(一四)
何が見える……諸家……(一五)(一四)(一五)
全国の名物と……水谷竹荘……(一八)
川柳行脚……(一八)
句報拝見……(一七)
★
川柳塔……麻生路郎選……(四)
同舟近詠……諸家……(一七)
近作柳樽……麻生路郎選……(一六)
北川春巣選……(一六)
一路集「末っ子」……西尾栞選……(一九)
「サンプル」……伊藤茶仏選……(一九)
金泥集……麻生葭乃選……(二五)
各地柳壇……(三〇)
川柳第二教室
一路集の選をして……中島生々庵……(二六)
不朽洞会から……(三四)
柳界展望……(一二)
先生のご病気に就いて……(三四)
編集録音……(三四)

川柳塔

天気予報うれしい嘘になりかけて　豊中市　戸田古方

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来　大阪市　西尾栞

零号の割切った意見を尊重し

最初から来られまっかと捻られる

行き違う汽船快晴の秋の湖

女降りて細い男が二人掛け　大阪市　市場没食子

風呂屋まで思い上ってストをやり

貸した金とれず師走も半過ぎ

麻雀に凝ったあげ句の療養所

老眼鏡かけて読んでる花名刺　西宮市　若本多久志

自叙伝に運のよかったのは書かず

二合瓶だけの懇親会ですみ

もったいない酒手のひらですすっとき

おごったるおごったる屋台の酎だった

あざやかにかわして仲居でも好きよ

うちの娘をやるに虚礼と云うとれず

売り出しの娘の焼増しを頼んどき

牧水でなくとも泌みる秋の酒

我も老いたり女房の知恵をかり

お二人さん御案内老妻と飯を食い

意地悪くからんで二号チトせしめ

重大な決意を聞けば禁酒なり

行楽の秋を交通事故で死に　ホノルル市　前山北海

仏教の悟りへ世間甘くなし

養国に古稀も米寿も競う帰化　ホノルル市　内藤草一郎

こんなのが着たいとモデル手を通し

本名でかけりゃ奥様気がつかず

たどりついた停年庭を作り替え　東京都　宮田不二

懐しい母校寄附には近寄らず

お芝居で観る吉原は文化財

歯の抜けたとこから女どっと老け　大阪府　川村好郎

金一封ぼやきながらもしまっとく

金詰りの顔せず専務出たっ切り

ビヤホールだけで口紅つきまっか

百円の義理が並んでいる寄附帖

しわ増えてきたがかけがいない女房

内心は父も気がせく嫁きおくれ

五十やっと親のすべてがありがたく

寄附の話中腰のままで聞き　ホノルル市　白砂旋風

アメリカも今度はヤケドする番か

借りの有るのは晩酌欠かさない

金儲け俺が俺がとコッコッと　ホノルル市　羽佐間柳葉

貧の眼に山桜水明何処にある

齢取ったなあと気が付くハイキング

俺だから良いがと好意仄かし　大阪市　正本水客

追って書本心すこし覗かせる

いつ会っても新しい恋の話をする

イヤリング外し夜食の輪にはいり

米持って歩いた頃の恋という

口げんか米磨いていて振向かず

無雑作に米流す女の手を見てる

妓に聞けば米どこを故郷に持ち

自転車を押して世話好き歩を揃え

自転車を押して峠のいい紅葉

石投げる楽しさ都会の子は知らず

手紙焼いた灰とは母が知っている

腹立てているなと返事読みながら　大阪市　丸尾潮花

雨の日の思い出ばかり残るひと　大阪市　菊沢小松園

あやまりに行く裏門で吠え付かれ

俺の目に俺の嫌いな人通る　大阪市　武部香林

知らず知らず米喰う虫になっていた

休日の蒲団の重みこころよし

労働歌いっちずぼらがタクト振り

平だったことを重役もう忘れ　出雲市　尾緑之助

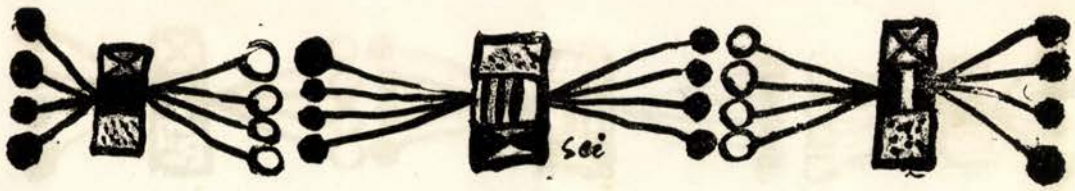
義兄の還暦

還暦に扨坦々と続く幸

早々にテレビも買った共稼ぎ

おみこしの後に神職横も見ず　大阪市　北川春巣

保険屋は頓死の例をたんともち



十年もはく程足袋も持って嫁き
二十年生きとし生きしものの幸　岡山市　逸見灯竿

ふぐ料理少し食うては箸をおき
野球では食えぬと丁稚に行かされる　堺市　吉田圭井堂

釣りに行く朝は誰にも起されず
妬いて拗ね朝寝で拗ねてまだ足らず　鳥取市　杉谷湖山

恥しい程の儲けをいたわられ
倉の壁落ちたままなり元地主
お上りの行く手を拒むラッシュにて
音もなく雨は砂丘の色を変え　広島市　国弘半休

酒をつぎ火をつけ女如才なし
時々は雨にかこつけ酒仙めき　兵庫県　小西無鬼

子供等は大人の行儀見てしまい
満員車やはり女性は柔らかく
吊皮よもっと伸びてよ満員車　尼崎市　小林文月

世話女房いつもハンカチ真白なる　大阪市　冨岡淡舟

活花展どこにも花が見当らず　奈良県　飯降白香

歳だからなあと退職割り切られ
ニコヨンの身には平和が物足らず
豊作の田圃閣屋も見て廻り
中風になってアイスの気が挫け
弱虫と女の方がじれったがり
生活力などとドライも打算的　防府市　長野井蛙

バタチーズお客の方へ味を聞き
まだ何を縫うのか妻は燈を下げて
騒がしい街で餅屋も餅を搗き　呉市　林野甦光

洋裁に行ってますのよ鴨を探しに
母の死へ涙も見せぬ娘に育ち　岡山県　直原七面山

首相あわれ営業用の笑顔もし
気にいった証拠に赤ん坊口へ入れ
ベビーベッドガラガラが落ち赤ん坊が落ち
子が寝つき母が寝ついて秋静か
番犬の様に演説怒号する
慰安会すんでお次はストライキ
観光バスこれで終いと駅が見え
人工衛星又玩具屋を喜ばせ
食えぬ子に何を教える修身科　大阪市　西森花村

天高し花野の線路づたいにも
再婚の見合は酒もすすめられ
引揚げの健康体へ柿たわわ
古本になって値打が出た句集
来年の旅へ横文字習い出し　鳥取市　河村日満

心中のきりようばかりが惜まれる　岡山県　福島鉄児

ビルの谷間の日向に犬が寝ている
生活にきしむ四十の首を廻す　宝塚市　榎南夏六

愛人の分もおみくじ引いてみる　岡山市　服部十九平

自棄酒をマダム迷惑だからとめ　熊本県　有働芳仙

生れでた訳が分らぬ裏長屋
エレベーターガールと二人切り上り
華道展焙って曲げたいい姿
修身科目上の真似はしちゃ不可ん
迷い子へポリスはパパの声になり　下関市　石川侃流洞

砂あそび小さなボスがいてもめる
商人の小さく負けて気を持たせ　広島市　山田季贅

一人旅人の稼ぎを見て戻り　大阪市　山本葉光

科学的な空想さえも古くなり
胡坐組み片脚短かく印を彫り　倉敷市　木村千容

女事務だまってペンを貸してくれ
新らしい修身要ることは要るね
月賦でもテレビは内には尚早よ
としよりの日今日一点の雲もなく
夏がよい冬がよいとて老の坂
素人を愚弄するかに株価動き
戦闘開始うてと子供のボスがおり　石川県　那谷光郎

客のキザ笑って朝の仲居部屋
香水が家出して来た娘に匂い
のし紙を夫婦で更えてこれでよし　石川県　野村味平

虫売がのんびり鳴かす交叉点
家元とふるさと同じ法界屋　大阪市　木村水堂

命まで捨てて女の意地通し
喧嘩していても気にする妻の咳　倉敷市　水谷谷水

おぼっちゃまおぼっちゃまと生みの親哀れ
大仰に死に顔ほめる如才なさ
やに下りあれじゃ亡妻浮かばれず
席とってあるに下座へわりこんで
売春とは淋し一家のためといえ
倉敷市　椙原一善

この人もやはりケモノの一人なる
女の執念十年前の事にふれ
真実の恋へ友情うるさすぎ
どの顔もお通夜してる顔でなし
おくれて来たに男まだ来てず
知識欲オモチャ三日とはもたず
岡山県　田村藤波

養生で言えば惜しむようにとり
虫の音に占領されて居る厨
代を経て扁額の文字まだ読めず
岡山県　岡田夜潮

左官かと思えば一家の主人なり
永が病笑った後の淋しさよ
保健証嫁のが一番いたんどり
小供の絵どの花も真正面に向き
叱られてきつう打ち込む向う槌
玉島市　臼井三林坊

木堂を掛けて中農程度なり
ミルク飲む夫人の顔が尖ってき
岡山県　本田恵二朗

信仰の自由先祖を置き忘れ
大阪市　真鍋一瓢

強いて云うなれば胃を病む程の富
宿題宿題あれじゃ灯下に親しめず
俗に生き抜く日曜の錐を揉む
買手待つ家となりけり陰火燃ゆ
目が覚めりゃかきこんで出るだけの家

憎たらしゆ見せようとやくざ苦心して
ストの非を説くは雑兵共の部屋
体操部委員で十文三分の娘
靴曰く我れ蟹股にはかれたり
船員の帰朝売女の御出迎え
栄養栄養それでただれた胃じゃないか
日曜を寝る男にて黴臭く
断固許さず戒名にして拝み
別れ話の嘘にどっちも子はやれぬ
借り上手なんて因果な生れつき
猫が行く襖内儀が立って明け
背の君の休日に下水つまったり
合借屋臍の垢まで見せ合うて
嫌な隣だが風除けの位置にあり
京都市　松川杜的

厄年をまだペタル踏む職に居り
立読みの裾を小犬が嗅いで過ぎ
立読みの向いはてんぷらあげる音
大阪市　佐野白水

子があるとは医者も誤診をした若さ
転課して毎日名刺減って行き
大阪市　後藤梅志

虫の声もう何里ほどきただろう
ニュース映画秋のすすきも見せてくれ
教祖的存在などと書かれ出し
人間の動作がもどかしい小鳥
一本になっても前歯のこしとき
さても怪獣に似た声を出す楽器
倉敷市　松村万古

此ののれん誰が継ぐのか寄りつかず
化粧ぶりアルバイトとは思われず
人間味苦労に耐えた皺で知り
郷愁の湧くほど旅をしてみたし

蚊のように財閥ひとの血でふくれ
秋来ぬと誰にもわかる炭値上げ
無理矢理に推した会長穴をあけ
衝突をするにや相手が小さ過ぎ
療養所忘られそうな冬迫る
倉敷市　藤井春日

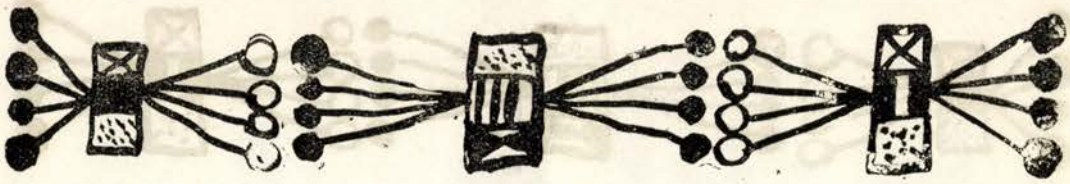
貯めて見りゃ幸福ほかにあるらしい
駄句ってるうちは借金など忘れ
パチンコの他は御趣味のない課長
はまってますねんとやくざ女房のバー勤め
ねじ込んで呉れたチップの恐しく
岡山市　津田麦太楼

斥候にゆくのか蟻の遠歩き
曼珠沙華突放された貨車一つ
四十年の勤続髪も捧げたり
張板が生垣を越すよい隣り
ぼろくそに儲け世間が阿呆に見え
米子市　小西雄々

風の音気にし詩人は詩が出来ず
寄附がよく集り神輿重くなし
軒下で田舎銀座のバスをよけ
パトロンともめ休業の続くバー
算盤をなでても値段まけられず
失恋の相手と敬老会で逢い
堺市　高崎雄声

盗人にすれば何でもない書類
老人が乗って来たので眼をつむり
尻馬に乗っていたのが背負投げ
網の目を逃れるように赤い羽根
岡山県　永松東岸子

敬老会背広の皺は気にならず
告別式でも顔を売る事考えて
孝行なとこ見込まれた養子さん



子もあるに等と古風なまとめ役
乗り越して淋しい駅で酔がさめ
倉敷市　野田素身郎

顔に似ず言いたいことはズバリ言い
天気予報聞いて病人どうする気
今日土工背広でトリスバーへ行き
恋に身を焼き尽くしたか少し老け
大阪市　山川阿茶

あんな人それは横から見ての事
お芽出たい長寿のはずを気兼して
ドンファンと知っててひかれゆく心
重役は垢ぎれの日をふと思い
始末書をかいているのよと悪びれず
大阪市　清水望峰

ハンコまた汚職につかれたなと思い
大阪府　川端鬼酔

おさがりを予算に入れた供えもの
おちょぼ口娘も春に目覚かけ
みをつくし素直な子だけの耳に鳴り
好かん蛸とは胴慾な振られ様
大阪市　木村十悟

赤い羽根にげてお好み屋へ入り
クレヨンのよう果物屋秋になり
予定数終了しました阿倍野墓地
大阪市　伊達堰子

利子天引虫も殺さぬ顔で貸し
店終うこんな捨値をまだ値切り
大阪市　不二田一三夫

大阪弁きようも損をした話
ちょっとだけよろけてみたいネオンの灯
名古屋市　長尾越鳥

腰折れてまだ篤農の名にこたえ
腰掛で寝たふりしてるアロハシャツ

風船の下を親子でかけて行く
なっぱ服なんとあわれな髭を立て
提灯をつるしただけで済む祭り
大阪府　深見雅堂

脂粉より魚臭の方を匂わされ
安宿の朝こおろぎに跳びつかれ
熱海温泉にて
美人芸者ついとりますと言う宿屋
十国峠にて
シネスコのカメラが欲しい景に立ち
伊豆大島にて
船橋ヘアンコ見る顔ひしめいて
三原山噴火口にて
霧に濡れガスにむせんでまでのぞき
芦の湖にて
豪雨沛然竜が出そうな波が立ち
薬びん提げても酒と縁切れず
神戸市　野村初市

暗米へ労れを見せぬ女連れ
金ふやす事ばっかりを云うて死に
お労れ様と素直に云えぬ妻の年
無口かと思えば養子よくしゃべり
大阪市　金井文秋

赤い羽根近所の人に呼ばれたり
上る時ばっかり株の本が売れ
就職のつもりで婿を選り好み
終電車も無いなと腰を据え直し
蝶ネクタイ顔にも自信ありげなり
岡山県　戸田喜楽

母一人子一人黙って箸をとり
妾宅で寝転んで聞く労働歌
唐津市　新岡回天子

姥捨をふふんと笑う若いなり
岡山県　池田古心

祭り日の馳走が妻の愚痴で出来
家柄がカリブソひとり持て余し
東京都　石居高志

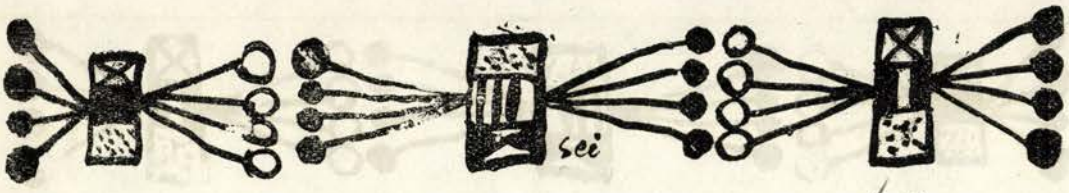
たまさかに逢えば怨みを糸にのせ
妻を刺す勇気があって落ぶれる
大阪府　早川清生

木犀の香を自転車で突き破り
デパートの屋上京を眺めに来
通勤車養子せっせと本を読み
健保車価引上問題

一円のことで仁術折れ合えず
テレビ来て家も落着けないところ
マネージャーめいて養子のハネムーン
忙しくなる案庶務にいて作り
演劇部美人の順に役がつき
宿題へ父新かなを駆使できず
こそばゆい敬語も将棋勝ってから
情夫もてあそんだ乳房子に与え
聴取書へ巡査ヨチヨチ字を並べ
婚家まで督促状がたどりつき
街角で美人と思ったらわが娘
二号にはなるが浮気はいやという
米基地へちょこちょこと入る郵便屋
強盗の話長屋にいて恐れ
小松市　伊藤茶仏

どないした呑めと社長もくだけとり
考えが古いそのっけからどなり
五千円札で売り子に手を振られ
人を押しのけてまでパチンコの台をより
堺市　辻圭水

審査員メガネかけたりはずしたり
おはらいが原爆の世に行われ



もじもじもしないでいきなり嫌いです
善通寺市　松岡委滄浪

重役を君づけにして総会屋
石川県　中松恒雄

夫婦茶碗まだ同権でない大きさ
覚えてはいたけど酒のせいにする

洗濯機に褌廻っている文化
ガード下ここにも権利金が要り
岡山県　野々口美舟

宿題の子は秀才のパパと座し
神戸市　小浜牧人

洋裁の自信独身主義となり
背景に雲が写って若う見え
秋の恋落葉の道を遠く消え
天理市　菱田満秋

孫出来てからは養子のうとましく
財布まで開けて女は買わず夫に
汚職でもせねば陣笠名が売れず
夕焼の街へ屋台が起きてきた
鳥籠を出るには出たが餌がなし
二号にも不渡り手形見せておく
親の眼に現行犯も信じかね
恋してた頃のベンチャラ義姉忘れ
原色を着てもおかしくない若さ
敷いているくせおのろけに念が入り
捨てられているに朝顔今朝も咲き
岡山県　池上知恵美

農村を出るタクシーは振向かれ
大安の荷へコスモスが揺れやまず
老猫がぐっとにらんだお留守番
大阪市　橘高薫風子

文机に菜根譚を伏せて留守
ステッキの先でくらげは突つかれる
女ひとり心の隅に随いてくる
振返りはせぬかと女まだ立って
真人間だったばかりに死を選び
旅僧の後姿が舞台めき
風鈴を残して家は売られたり
下関市　中村九呂平

児が出きてからの苦情は鼻で受け
共稼ぎ鰯と大根とが戻り

三味線を出して女房を驚ろかせ
焼芋屋対立をして赤字出し
山口県　多田ほなみ

いちじくをもぐ子へ秋の駈けて来る
恨みなど忘れ余生を鉢に生き
奈良市　宮口笛生

麻雀に宿の布団は敷いただけ
大阪市　西川晃

早合点して惚れといて欺したな
倖な人なり善意だけで生き
自己宣伝やっぱり効めあったらし
母の会僕の女房が会長や
怯んだと見てから勇気百倍し
鳥取県　田中蛙眠子

趣味広く浅く祖先の土地を売り
ユーモアの壁が刑事に部厚すぎ
名優へどん帳重う重うあけ
名古屋市　野田一念

係長ぐらいで腰に手を当てる
働きに行く日はこんな良い天気
岡山市　林葵丘

税金の義務教科書へ入れたがり
アルサロに勤め鼻声うまくなり
神戸市　仲どんたく

腹立てて立てて娘の帰宅待ち
せんだんは双葉からもう金を溜め
ダンサーへ客は千円札に見え
赤い羽根てれくさそうにつけられる
服の紅拭いてるところを見つけられ
息子より娘がプロレス熱を上げ
うなる程持ってて手ぶらで逝きにけり
名月へなきあかす気かこおろぎよ
家中ですかして見てる五千円
香煙の中から故社長にらんどり
月給日一寸よろめきたくもなり
銀行にはさまれていて金詰り
割勘でおやじの墓がやっと建ち
平田市　久家代仕男

婦人会酒は男のものならず
後進のなどと辞めたくないくせに
あけすけな意見が胡坐から生まれ
大阪市　本多省三

停年のゴルフ用具をもてあまし
上役に出合うてガムが邪魔になり

新児童ヴァイオリン・サークル
講師　麻生アート
奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地
生駒教室
TEL306バン
西宮市仁川町五丁目七番地
くるみ幼稚園
TEL638バン甲
★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい

円空と柳眼

東野大八

私と机を並べている同僚に、山下丈夫君なる、まことに性誠に好もしき若者がいる。

某日（といっても昨年四月のことだが……）「円空上人とその彫刻」という一文が舞込んだのがきっかけで、いつかその円空上人なる坊さんと割りなき因縁を生じてしまった。つまり、その一文の紙上紹介から、次第に円空熱が上昇し、このほど岐阜県立図書館の催し場で盛大なる「円空展」を開くところまでこぎつけた。

県内の各仏寺からや、上人に関する資料を持たれる人々、その他有識者が続々と彼の手許へ、連絡、来訪し、果てはその上人の彫った仏像受領に手近の山や、里をかけめぐり、数貫の仏像を背におい山坂をたどり、仏さまと同座の車で、へき地の棧道を走るといった具合である。あるときなどは、四百メートルの山門から、仏体を背に道に立つや、黒雲空にみなぎり、ふもと近くに及ぶや雷雨ハイ然と来って彼の面を打ったこともある。

「そのうち、貴下の徳に感じて、円空さまが中夜、君のまくらもとに立ちたまい、善哉、善哉とのたまうであらうぞ」と私は、冷やかして笑ったほどであった。

さて、円空＝寛永五年（一六二八）から元禄八年（一六九五）＝とはそも何人であるか。その古事来歴を探るには、以上の因縁でいささかも困惑することはない。「近世奇人伝」によると、次の様に書いてある。

（写真は名古屋市中川区荒子・観音寺蔵の天部形立像（像高六〇センチ）で円空彫刻の手法をよく現している。

「僧円空は美濃国竹ガ鼻という所なり。わかきより出家し某の寺にありしが、二十三にて遁れ出で冨士山にこもりまた加賀白山にこもる。ある夜、白山権現の示現ありて、美濃国池辺弥勒寺再建のことを仰せ出せられほどなく成就せり。のち飛騨千光寺に遊ぶ。その架茅にありける僧俊乗といえる世に無我の人にて突よければなり、この円空の もてるものは、なた一丁のみ、常にこれをもて仏像をきざむを所行とす。架茅山にも立ちながら枯木をもて作れる二王あり、今是をみるに神作のごとしとかや、またあらかじめ人の来るのをしる。また人を見、家を見ては「久しくたもうべし」或いは「いくほどなく寝うべし」といえるにひとつもたがうことなし。或時此国高山府金森侯の居城をさし「この所に城気なし」といえるに一両年の間に、飛出羽ノ国替えありて城は外廓ばかりとなりぬ。また大円生といえる池は、池の主人をとるとて常にひとりゆかず、二人ゆけば故なしといえり。さるにあるとき円空見て「この水この比にあせてあやしき事あり、国中大いに災に陥るべし」といいしかば、人々怪き「いかにしてこの難を救い給われ」と願いしかば、やがて彼の手にて千体の薬師像を不日に作りて池に沈む。その後何の故なく、はた是よりはひとり行く人も喰りなし。円空その後エゾに渡り呪法を誤き、今釈迦と名づけられしが、後美濃に帰りて終をとれり。この地にていわや上人といいならえるは、岩屋に住める故かも」

円空展とは、その上人がノミ一丁で刻んだ彫刻で、約百余体が集った。

眺めると一番大きくて約八尺、小さいものは約一寸あまり。仏体は、諸仏一切に神将まであり、一刀彫の豪快活達さは、まことに壮絶の感があり、興味深いのは、木根、円株の木目をそのままとらえて、衣の綾とし、筋肉の躍動としたことで、岐阜市展の審査員できた、一流彫刻家も舌をまく出来栄えである。この仏身は、民家に借りられ、重病人の枕頭におくと忽ち快癒したとあり、その像は患家で用済みの際は丹念に洗浄して寺に還した。そうした仏体十余は、見しながら、そううめいたことであったが、一しお魂こむる作と思われるものには、うず高いサイ銭の山である。

「一つ欲しいと思っても絶対寺や信徒の方達は離さない。そうするとタタリがあるからだそうですよ」と彼は言う。

とにかく円空三百余年にしてはじめて宗門と別れ、作品価値の高さ、深さで世に出たわけだが、早くも京阪神あたりから、わざわざこの展示作品を見にくる人も出かけてきた。

ところで、私がなぜ円空さんの作品を、この誌に載せたか、ということだが、それは心ない木片の性状、容体を生かしてノミ一丁で、その物体に魂を吹きこんだということである。カン、カン、カンと無造作に木片を落し、眼鼻立ちをスイスイと彫り、シュッシュッと切目を入れると、忽ち一個の仏像となる。一刀真正に無駄なく活如と生身をみる如し。どこかこの表現技術の気魄の鋭さが、人間生態の何かをとらえて離さぬ柳眼をホウフッとさせていたからである。私は、人、心のままに木彫するけれども、その活殺の心は果してどこに在るかをしみじみと考えさせられたことである。

終りに円空さまを路郎先生の枕頭に祀せ得れば、とも思った次第である。

まこと、チリ一つ止めず顔形もさだかでないすがすがしさであった。

うむ、いずれにしても見事、と私は山下君の案内で一つ一つを拝

川柳文学の再検討（五）

田中辰二

更に江戸勤番の武士及びそれに伴うインテリ層に相当作家の対象をもち柳道を拡めたと思われる点で従来の研究者までが全く見落している事は万句合出版の時日である。万句合は初代川柳ばかりで無く他の点者も沢山ある。「嬉遊笑覧」にも「前句附判者多き中に宝暦の末明和の初め頃机鳥、露丸、川柳等大いに行はれ月次万句合として集まる句数一万六七千勝句四百四五十半紙五六枚に暦の如く細字に印刻して摺る」とある。そしてどれも各自の暦摺に合印をつけて出板しているが川柳点のそれのように秋頃から月に三回出板し十二月に納会している。川柳選のものは毎年八月（閏年は七月）から毎月五の日即五、一五、二五の三回開巻すぐそのあとで刷物を発行しているし毎月一の日は圭女、二の日は錦江、三の日は収月、七の日は黛山、八の日は露丸と開巻しているし、川柳と同じ五の日の開巻は菊丈のそれであつた。

川柳の死後も見利や幸々評の万句合が八月以後に出板されている。川柳評の万句合は毎年八月五日初会で十二月は五、十五の二回で終巻となるのが普通で稀に一二回例外はあるが十二月の末の口上に「最早月つぱく仕候に付目出度休み又々来午年中秋五日初会と仕致興行候間、其節相変らず御最員奉願上候」（宝暦十一年十二月末口上）とある、興行の意義は句会とか開会の事で今日の興行とは内容が違う。何故この種のものが秋冬に限られたのであろうか。明に十二月は月迫で江戸では十三日の煤払以後正月用意や大年の総決算で慌ただしく一月は諸種の儀式、年礼等で作句の余裕もすくないであろう。次いで賀の祝の為に勅使下向とか紅毛人参向などいうこともある。三月には奉公人の出代と云つたこともあるが江戸勤番の武士もこの頃は落ちついていられない。それは寛永十二年家光の定めた武家諸法度に大名、小名参覲交替期を毎年四月に定め七月に譜代大名の交替を命じた。寛永十九年には又制度を改め八月を交替期にした。後一二回此の期を変更する事があつたものの前句附集などが漸く出板され続いて川柳などの活躍前後の参覲交替期は外様大名は四月、譜代大名は八月を以て其の期にするよう復活されたのである。それだけ中秋から年末をねらうのが最も有効に考えられた事は自然である。但し一月から八月までは江戸に残つている旗本御家人さてはインテリの富裕な町人階級などの所謂連で奉納句会、相撲句会、連の句会などを開いたり配りものの刷物を発行はしていたが総合的な大きなものとは言えないのである。

私は更に諸種の方面から力説する予定だつたが限られた紙数をかなり超過したので何千と集めてる例句を省き従来の観点が非常に誤つていた事。川柳文学が純然たる町人文学とのみ云い切れぬ事。或るものは武士自身の自嘲文学を多分に含んでいる事。元来はなぐさみ娯楽を中心とした文学であり「なぐさみ」を中心として歴史句や写生句を軽く描写している所に皮肉味も盛り上るが殊更皮肉や諷刺を中心に覗う文学では無かつた事。武士達の親しむ謡曲の素材や軍記物や武鑑で詳しい諸藩の定紋などの題材のすくなからぬこ

と。などを指摘し、併せて素養低き町人達が太宰春台が「独語」で述べたように雑俳から賭博的に三笠附などに趣味を拡張されたのが幕府の厳禁する所となり、以来あるものは興味の世界にどやどや入りこんで駄洒落、悪洒落をふりまわし点者の素質も低下して、狂句調に堕落したこと。但し川柳文学は上層たりし武士などの作家も多く又泰平を謳歌し時の政治の批判は許されない時代であるだけに落首のような不平文学では毫末も無いこと。更に時代を反映する文学であるだけに今日の柳壇でも時事吟は其の生命が短くいつまでも同じ感動を与えないように江戸時代の時事吟が今日の人々に難解になり感激を与えず、一方謡曲趣味の減退から現代人の青年層には歴史より自己の環境を描くに興味がうつった事。これはやがて江戸時代から残されて心の俳諧にもつながる人情詩生活詩と交渉をもち表現は古くとも柳多留の若い篇にこの種類のものも多く見出される為古川柳が無上によいものと考えてしまう事。現代の川柳が明治大正昭和への政治家古島一雄氏の企図したような時世痛罵の句にはなり得ず風俗詩としての軽文学に進展して来て可笑味本位から心のうがち本位になつて来た事など。例句によつて又諸文献によつて論述しようとしたのであるが徒らに尨大杜撰さを重さねるのみであるから此のあたりで擱筆し可笑味やひいて川柳文学への大方の再検討再認識を冀いたいのである。

（完）

上には上 下には下

北川春巣

「私の川柳は医者より古い」とは私の口癖であるが、その医者になってから今年で満二十年になる。そこで此の秋同期生五十余人が集り、恩師をお招きして、ささやかな祝いの会を持った。その席で最年長の八十才近い和田名誉教授が立上って祝辞を述べられ、「……先日は卒業三十周年の人々の祝賀会に招かれたが、やはり十年の違いはあって、その人達よりは諸君はかなり若い……」当然のことではあるが、我々の中には禿げたのも居りグレイの混ったのもいるので、一同苦笑した。先生は言葉をつがれ、「私は一八九九年に医者になった。今日迄五十八年間医者をやっているわけで、諸君は医者になって二十年だと云って祝っていろけれども、私の目から見ればまだまだ子供だ。これからまだ十年二十年三十年と生きて世の中のために尽くして貰いたい。」云々。私は上には上があるものだと思った。

又別の会で、現代心臓外科の権威、恩師小沢教授のお話しを聞いた。教授は、内科の大御所、故人沢達吉博士の直話だと云って次のような話しをされた。

「入沢先生は侍医もしておられ、その名声は当時全国に嘖嘖としていた。或る時郷里の流行医で肺疾患に罹っている人を診察された。先生は型の如く胸の聴診打診をされ、今度は背中を診ようとされた。その医者である患者は何故背中まで診なければならぬかと訝った。先生が、肺をしらべるためには背中も診なければならぬことを説明されると、その患者は背中の方にまで肺があるのですか、とびっくりしたとのことである。それが近々三、四十年昔のことである……」云々。今日の医学常識から見れば、素人でもこの医者のような考えを持っている人はあるまいと思うが、それにしても下には下があるなと思って聴いたのであった。

我が川柳界の方はどうであろうか。初代川柳が「万句合」を初めて発刊して今年が丁度二百年に当るとのことであるが、路郎先生がその二百年間のうち今日迄五十余年に亘り、川柳をつづけて来られたことは誠に偉とすべきである。田中辰二氏の「川柳文学の再検討」によれば、柳翁は一般に云われている程には名歌者ではなかったと考えられる由であり、俳句の方はも一つ名作家ではなかったと信じられている。路郎先生は遷と云い句と云い、現代柳界の大御所であることを疑う者はないが、それにしても柳翁時代から二百年の間に、川柳がどれ程進歩向上したと考えられるだろうか。科学の方では人工衛星あり、医者の方では心臓手術あり、と上下格段の差があるが、柳界の方では柳翁時代と現代とにおいて、レベルの差がそれ程にあるだろうか。とても水爆と竹槍程の差はないと思うのである。川柳と科学とは同日に談ぜられぬかも知れぬ、芸術とは一般にそんなものかも知れないが、その大差のないレベルの間に於いて、上下のランキングがあるのも事実である。私達は絶えず上を見ながら、川柳を人工衛星にまで向上させなければならぬと思うのである。

御贈答に
大丸の商品券
三百円～一万円
京、阪、神三店の他
高知、鳥取、下関、
別子、博多に共通／
一階 御堂筋側
大丸
大阪心斎橋

没句の中から

麻生路郎

不朽洞の没の句の中から句を拾って、多少とも参考になればと云うようなことを書いてみた。選と云うことは実に難かしいことである。還境なり、性格なり、思想なりの違った各作家に対し、選によって、それぞれの作家の行くべき道を指示しなければならないのである。こちらではその作家の行く道を指示しているつもりであっても、いっこう汲みとって呉れずに歯掻い思いをさせられることもあるし、案外にすくすくと伸びて呉れて快心の笑みを禁ずることの出来ないような場合もある。六カ月もかかっても、一歩も前進しないとなると、こちらの方が、いらいらしたり、情ない気持になったりするものである。そんな時に、多少コツがのみこめて少し句らしい句が抜け出した時には、抜け出した作家自身よりもこちらの方がホッとするものである。だいたい不朽洞の句に対しては、一句一句批評なり、添削なりしたいのである。何分多数の作家のことであるから、それが不可能なので、目下のところでは選によって作家自身の行く道を指示しているに過ぎない。しかし、選者としてはそれでいいんだとは決して思っていないのである。そうした悩みから、没の句の中から、次ぎのようものを書き、作者共通の欠点を指摘して、作句上の参考に資することにしたのである。従ってこれは例示した句主だけの問題とせず、作家の一人一人の問題として取りあげて欲しいのである。

○

A氏は旅の句を沢山寄せられたが、いただける句は一句しかなかった。次へ没の句を例示しょう。

旅を行く子等はデッキに立ちたがり

空いていた汽車へ団体のやかましく

団体で乗りこむ夜汽車はねむらない

冨士山の姿はっきり明けた窓

以上は車中を詠んだものの中から抜いたのであるが、これ等の句は確かに車中風景には違いないが、至って平凡な事実を叙したのである。作者自身には何程かの感激はあったのであろうが、これらの句が第三者を動かすに足るとは思えない。

次に「大島」と云う前書の句で

遊覧船軍艦マーチで切るテープ

遊覧船太平洋の波に酔いのような句が並んでいる。その時はそうであったのであろうが、それは何処ででも見られる情景であって特異性がない。殊に「軍艦マーチで切るテープ」では、その情景をありのままに叙述したというだけであって、所謂川柳味がない。川柳には川柳の特異な味や匂いを持たねばならない。言い換えれば川柳の眼で物を観るということである。作者は小林橙舎の

恋人の外はどうでもよいテープ

と云う句を深く味ってみて欲しい。同じテープを詠んでも、こんなにも違うものかということがうなずけるであろう。

B氏の句に、

船尾より出てゆく煙秋の湖

と云うのがある。感じはよく出ているが、それ以上のあるものを持たい▼杏林川柳会（大阪市）句会は十一月十九日午後七時半長堀橋牟田一哲居で開催。麻生葭乃女史出席▼大阪逓信病院鳥ヶ辻川柳会（大阪市）は十一月十六日午後二時五階会議室で開催。麻生葭乃女史出席▼南海電鉄句会（大阪市）は十一月二十五日午後六時半難波高架下で開催▼噴煙（熊本市）歳末川柳大会は十二月八日午前十時熊本郵政会館で開催。兼題、高級・五千円・穴・影法師・スチュウワーデス。講話大島濤明氏▼今村蓼之氏の還暦を祝う川柳句会、十二月八日午後一時、弥栄中学校作法室で開催。兼題、白髪・新聞・洋傘・これから・河豚・迫る・各三句別に席題、会費不要▼堺市文化祭市民川柳大会は十一月三日労働会館で開催。河盛市長の挨拶があり盛会だった▼大竹市（広島県）文化祭川柳大会は十一月三日開催。川雑広島支部から国弘半休氏出席、盛会▼竹原川柳会（広島県）は十一月四日竹原町文化祭短詩型文学コンクール句会を開催。柳人多数参会▼川雑倉敷支部句会は十一月十日慈愛幼稚園で開催▼川雑備前支部十月例会は浜田久米雄氏効績章受彰記念句会を兼ね十月二十六日娯句楽居で開催▼広島川柳会は十月二十七日三滝松茸山吟行を催し盛会▼広島川柳会は十一月十五日慈仙寺にて開催これまた盛会▼長陵川柳会（長岡市）は九月十五日第三回市民川柳大会記念として「当用漢字一覧と送りがな表」を当日の参会者に配付した▼正木龍樹氏（金沢市）らの首唱により明年四月二十九日天皇誕生日を期し朝鮮、外地、内地の物故川柳家慰霊川柳大会が長崎市で開催される。連絡先は金沢市大豆田町六七正木柳建寺・長崎市新大工町五池田可宵氏▼麦飯川柳会（鈴鹿市）では大阪の曾我廼家十吾劇団の宝蝶、弁天氏ら川柳天守閣（宮島天真氏主宰）の人々の手で高塚町荒神山へ川柳の献句標が建ち十一月十七日午前十一時から除幕式が行われた。

消息

▼河村日満氏（鳥取市）は九月十九日日本海新聞へ川柳鳥取特集の題下に東京旅行記を執筆された。「靖国へ外人も来て手を叩き」ほ

柳界展望

句会

▼本社師走句会は十二月八日（日）午後一時から下寺町光明寺で開催される。多数出席を賜り

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪

たない。川柳では、そのあるものを必要とするのである。それは人間臭ささかも知れない。

C氏の句の場合、

怒りっぽくなった此の頃胃が悪し

というのがある。これは小主観の句であって、怒りっぽくなったことと、胃が悪るいと云うこととは誰でもそうだとは云えない。そうだとすれば作者の単に健康状態を述べただけであって川柳としての面白味を発見するに苦しむ訳である。「怒りっぽくなった」というところまで読んでそのあとを期待していたのに、胃が悪しと続けられたので、すっかりぶちこわしてしまったと感を深うした。この作者に限らず、下五や下七を案外安易に詠んで、折角の構造を打ち毀す場合が多い。句の措字は何処までも慎重でなければならない。同じC氏の句に、

帰朝談日本ほど良い国はなし

と云うのがある。これはよく聞く問題だけに穿ちの句としては通用するだろうが、川柳と標語の間を行く句であって、いっこう感激を伴はない句だと云わねばならぬ。

D氏の句。

年若く見せても顔に陰影があり

なるほどそうかと云うだけで、それ以上の感興を喚び起こさせない。何故だろう。これは作者が説明をしているだけであるからである。いつも云うことであるが、句は説明でなく描写でなければいけないのである。作者がウッカリ首をもたげると、えてして説明に終ってしまうものである。同じ作者の句で、

五十代活弁時代懐かしむ

など、ごくおおまかに、上っ面をなでたような句であって、作者が感激するほど、なっかしみに同感が持てないのである。

それから矢張り同じ作者の句に

雨ニモマケズ風ニモマケズ
配達夫

と云うのがあるが、なるほどそれに違いないという、所謂そうですか川柳ではあって、作者自身実際その風景に打つ突ったので同情から生れたものかも知れない。この句、特にカタ仮名を用いたのは教科書とか俚諺などの引用とは思うが、配達夫にはツキ過ぎて当り前のことの説明用語となって効を奏していない。

E氏は実に多作家で、毎月欠かずさ二百句内外を寄せられる。それがもう六、七年来続いている。

投句規則には触れているが、あまりの熱心さにほだされ、選句を続けて来たが、作者の視野が狭いので、自分の句の類想句が実に多い。自選をせずに、作った句を皆寄せられるらしいが、初心者でない限り、他少の自選は出来る筈であるから、こんなに沢山な句を寄せられる前に一応の自選をされたいものである。自選も勉強の一つであることに思い及ばなければならぬ。

十四で恋をささやくドライな娘

この作家の欠点と云えば、説明句の多いことである。これでもか、これでもかと云うに説明をしてかかる。それでは味も匂いもない句になってしまう。この句にしても、そうですか川柳に過ぎない。それから「十四で」の措字に多少の云い分がつくであろうし、娘(こ)と名詞止めにしたのにも難がある。同じことでも

囁きへ娘はセーターを編みつづけ

と云えば、前句よりも、より具体的であり、描写的である。その点、前句と比べてはましだと云えるが、この句には古句に「そんな事存じませんと鶴を折り」の句のあること知らねばならない。同巧異曲のこの古句が情緒豊かであり、表現にソツのない句であることを学ばねばならない。この作者は多く作るばかりでなく、もっと古句など(現代句も)を読む必要があろう。まだ多数の作家の句例を取りあげたいが、誌面に限りがあるので一ト先ずこれだけで筆を擱く。

か。なお氏は明春一月十七日羽田空港より第五次労働団体視察団員として約四十日米国における労使関係視察に発たれる。ご成果を祈る▼国弘半休氏(広島市)は十一月十六日JOFKから「菊人形」の課題川柳の選評を放送された。尚同氏は山田季賚氏と同行十二月の本社忘年句会へ出席の予定であると▼大西迷窓氏(高知市)は十月二十日以降高知毎日柳壇の選評を担当された▼直原七面山氏(岡山県)は「川柳笠岡」創刊号記念祝賀川柳大会に出席、兼題ライバル選評。春日療養所にて「斗病の丘に野菊が咲き乱れ」の句信があった▼速水真珠洞氏(福岡市)は九月二日大牟田埠頭から天草灘を経て島原市南風楼に一泊。九州西端の風光を賞で「波音に蜻蛉ひらたに飛ぶ芝生」の途中吟を寄せられた▼水谷竹荘氏(大阪市)は十一月中旬四国一周旅行をされ大西迷窓氏ほか高知支部の人々と一夜柳談に明かされ「巡礼に逢う旅四国なればこそ」の句信を寄せられた▼里田一ン十氏(芦屋市)は箕面公園滝の畔へ俳人後藤夜半氏の句碑「滝の上に水現れて落ちにけり」建立に奔走された由▼西いわを氏(大阪市)は十一月十六日北陸芦原温泉に行かれ「東尋坊海女も写真の中に入れ」の句信があり、酸素をたっぷり吸って来られた▼土井文蝶氏(大阪市)は市立桃山病院に入院加療中であるが経過良好十二月上旬には退院出来ると。早く元気な顔を見たいもの。

轉居

▼清水白柳子(大阪市)は東住吉区矢田住道町八八二へ移転▼菱田満秋氏(天理市)は療養の場所を西宮市今津水波町谷向病院に移された▼竹内千里氏(大阪市)は南区河原町一丁目ミス大阪前大萬すし方へ移転▼松村万古氏は旧住所倉敷市水島弥生町一丁目七に変更▼三鴨美笑氏(米子市)は目下病気療養中のため事業一切を夫人に一任。住居並に川雑支部を米子市立町三丁目十九へ移されたと。ご全快を祈る。

改号

▼田口一瓢氏(熊本市)は麦彦と改号。

正誤

▼十一月号十九頁虫迷庵を幽迷庵と訂正。(梅)

あなたの家から何が見える

・アンケート・

六甲山

西宮市　**若本多久志**

西――にはあの懐しい六甲の山々が、四季それぞれの飾りで眼を楽しませてくれ、夜ともなれば山頂の航空標識燈が点滅して、郷愁をそそります。

北――の裏庭にはいろんな形の花壇に、丹精した草花が秋、酣です。

南――は約百坪程の庭で、私には一寸重荷なのですが、誰方かの句に「我も老いたり燈籠に苔を待ち」と同じ心境が、せっせと手入れを促します。

東――は大金持のお隣りで、コンクリート塀がでんと冷たく建っていて何も見えないのは寂しいことです。

米どころ

出雲市　**尼　綠之助**、

東

小さな庭園から望む遥かなる低い山並、朝陽に恵まれているのが何としても幸、路郎師から「遙山亭」の名を頂いた以所である。

西

お豆腐屋さん、暗いうちから機械が廻り、時計の代りになる。

南

出雲大社へ行く国鉄ガソリンカーが何回となく往復する。これ亦はるかに三瓶山が空に浮いている。

北

農家の先にバス停留所、そこに田舎の百貨店、五〇米。

屋根へ上れば

大阪市　**須崎豆秋**

机の前の硝子窓へ近くの大きいムクの樹の枝葉が、四季の姿を鏤ばめ、新緑、黄葉の頃とか月夜などはとてもすばらしい天然色テレビとなって、目を楽しませてくれます。「私の家から見えるもの」はこれ位なものだけですが、而し屋根へ匐い上って見ると、とても素敵です。つい鼻の先に新世界附近の灯の海の中に通天閣の電飾が点滅しており、その灯の流れはジャンジャン横町から飛田大通りに連なって、飛田遊廓の赤い青いネオン模様となります。凡そこの屋根からだと人工衛星の外は何でも見えます。

猪が出る鹿が飛ぶ

岡山県　**浜田久米雄**

名古屋に嫁いでいるぼくの妹の主人が岡山から東京までの間にせせこましいと思われるのがこの辺と関ケ原辺と二カ所しかないといっている程せまい山の中である。昨年から水道がつき近いうちに電気機関車が走るという文化の中でいのししが出る鹿が飛ぶ有様である。従ってぼくの家から見えるものは田圃と山と空でそのせまい場所に家が四軒建っている。ぼくの子供時分には一軒しかなかったのがふえた訳だ。向いの山には猪を捕るわながかけられこの夏は三頭つかまえた。ぼくにはなつかしい山である。

京は山ばかり

京都市　**大鶴喜由**

京都市自体がどちら向いても山ばかりの中の盆地にある。西一丁水位の低い加茂川、東一丁水位の高い疎水が流れ、東には子供でも知っているお稲荷さん。やや北に名高い東福寺があり、庭には「古池や蛙とびこむ水の音」の句碑がある。北は何も見えぬが夜空を紅く染めているあたりが、何でもかなえて呉れる京極。四条河原町、祇園あたりとでも申しましょう。西は呑んだり吐き出したりしたり忙しい観光京都駅がある。南はこれというものが見えぬが昔この辺で深草少将が小町は女なりやとなげいたところ。

寺やら倉やら学校やら

堺市　**八木摩天郎**

家から、空が見えると云えば貧乏くさい。星が見えると云えば雨漏りを思う。太陽近きか、長安近きか。東の隅に見える錦小学校のバルコニーは、吉田大将を生み、浪六を生み、政友会幹事長山口義一を生み、風水害で、教師始め三十四児が死んだ。朝の朝礼の拡声器は、僕が叱られてるようだ。南の隅は堺別院の甍で、元は堺県庁だった。明治天皇行幸地。今は吉葉山一行の宿泊所で、あの瓦の下で角力最中。小結ならぬ、おむすびの様な、力士連！　結髪あり、散バラあり。北隣は、宮さん宮さんの品川弥次郎の先生で、伊藤博文と松下塾同窓の、松本元男爵邸の倉が見える。何時の日に、人工衛星が見えるだろうか。

下関李ライン

下関市　**石川侃流洞**

市内閑静な高台の一軒建。家が南向きだから、南から東へぐるりと一廻りします。前面の丘が韓国人部落。これを区切る大きな道路

大阪中ノ島

サトウ花店K.K

大ビル・TEL ㊹1162

があり。これを称して下関李ライン。隣が火葬場。遠方に金比羅砲台。門司の風師山。馬関砲撃の台場、国道トンネルが堀られている火の山砲台、霊鷲山の仏舎利塔。真東が放送局、下関球場、背景に勝山城跡。東南に、南高、西高、下関商高が並んで千丈ヶ原砲台。それが切れると、日本海の一部が雲のように浮いて小学校になる。

閑静

唐津市　新岡回天子

東—松浦の名勝!! 松浦潟の展望台と云われる鏡山

南—嘗て弐千五百有余名の生徒を有し佐賀県一と言われた唐津第一中学校

西—末っ子が通う市立長松小学校を経て西陽の沈む温石山の連峯

北—唐津駅から西唐津に通ずる唐津線の線路を越えて市内の繁華街（但し繁華街は忍術でなければ見えない）

四周一括—田と倉庫ヒッソリとして駅の裏　（回天子）

道頓堀

大阪市　山川阿茶

我が家

頓堀の虹の流れる河岸に住み

水都祭　大阪球場の花火

寝ころんで押れずに見る遠花火

夏の夜

貸ボート橋の上から野次られる

料亭

税金をねぎって宴会派手にやり

ホテル

禿げたのが孫の様なを連れて入り

旅館・修学旅行・お上りさんたまに来た都会のネオン雨にぬれ

通天閣

窓に倚り通天閣の灯をながめ

子卯午酉の方位には

兵庫県　小西無鬼

子の方位　元連隊の北に盃獄あり伏せたる盃に似て名あり、僕もほつほつ盃を伏せるべきか。

卯の方位　霊けんイヤチコなる王地山稲荷あり、僕の信仰厚し。直ぐ上にミュージックサイレン塔が建設され朝夕音楽で時を知らして呉れる。又楽し。

午の方位　心眼を開けば路郎先生の「野崎詣り」見ゆ、目先の庭園は野山に似て木々は散髪を待つが鳥や虫は日々楽しく歌う。

酉の方位　本年は暗殺。何も見ない事にしている。

料亭の灯

高知県　大西迷窓

この夏の花火大会の夜でした。子供（四年六ヵ月）から僕の家から何が見えるねお父ちゃんと尋ねられました。実に偶然「あなたの家から何が見える」のアンケートを頂きました。家からは料亭と、キヤバレーの灯が見えます。子供には沢山のきれいな電気だね、だけどお空にはもっともっときれいなお星様が見えていいね、と其の場をつくろったことを記憶しています。高知駅は北、桟橋は南、野球場は西、播磨屋橋は東と、便利なところですが家からは見えません。酒場があまりにも近かすぎますの一相当の精神力の必要なとこです。

裏の庭園だけ見ている

米子市　三鴨美笑

米子城山も城がないから山だけが高く、それでも松の枝振りは昔の当時をもの語るように見えるが、秋の色どりは二階からでないと見えない。大山も白い雪の姿を見せているそうだが、腹膜で斗病生活の私にはそれも見ることが出来ない。

ただ裏の古い庭園を見ているばかりである。この頃では庭池の向うの楓が紅葉してきて小さき風雅をそえてくれる。庭池のまわりに咲いている秋海棠のピンクの花は可愛い感じがする。病気が快くなったら川柳行脚に出て何んでもよく視たいと思っているがさてこの斗病が何つまで続くことやら。

あなたの部屋から何が見える

大阪市　松江梅里

私は表二階の最も見晴しのよい部屋を書斎にし起き伏している。時には客間にも早変りをする。私の家の向いはカトリックの教会とその附属の幼稚園である。二千坪もある広大な庭園に壮厳な会堂が毅然と聳えている。屋上の頂点には燦然と十字架が輝いている。庭園は隈なく花園で四季折折の花が眼を楽しませてくれる。居ながらにして異国情緒を味うことが出来る。私は日夜眼下にこの庭園を眺めて我家の庭園のような錯覚を起すことがある。午前六時に決って朝の祈りのあと、しずかなメロディーが流れてくる。そは讃美歌のコーラス。如何にも厳粛な中に慈しみに満ちた和やかな感に打たれる。黒衣の尼僧が三三伍伍会堂から出てくる。大体私の家の附近は「女中より犬が大事な家並ぶ」の句のとおり立派な邸宅が櫛比している。電車・バスの騒音も聞えない。時折車が通る位い、これが商都大阪かしらと思う程閑静である。

夜はまた有名なアベック街道で幾組かの喋喃組が行き交う。売春禁止法に依って最近飛田、松島辺の楼主が旅館に転同せん為この邸街に眼をつけ、巨万の資を投じて売収に躍気になっている。お蔭で品がさがって土地の値が騰る。そのためか最近めっきり温泉マークが激増して来た。丁度私の家の裏側に二軒殆ど同時に温泉マークが出来た。アクドイネオンが高高と掲げ両者鎬を削っている。それの見える部屋は十供等の勉強部屋になっているのでこれは環境衛生によろしくないとて表二階の私の部屋と入れ替ることにした。表と裏あまりにもかけ離れたとり合せである。五年生になる末つ娘にバストイレット附二時間五百円てなんのことかと問われ返答に困った。

体力をつくる
強力…綜合ビタミン剤
強力パンビタン
錠（30錠・100錠）　はかに　ミネラル入M
大阪市道修町　武田薬品
ウロコ印
武田薬品

近作柳樽

麻生路郎選
北川春巣選

蓑虫よお前に負けぬ寒がりや　西宮市　野呂　鵜汀
同業の破産で息を吹き返し　同　同
歯車の中の一つの俺なのさ　同　同
花道の役者に似たり浜の松　同　同
嬉しさを子供逆立ちして見せる　同　同
鶏を放して米屋店仕舞い　同　同
絶世の美人で恋に遠く居る　同　同
会議中助役うどんの腹が減り　岡山県　太田　蓑流
娘の無心かしことあって苦笑する　同　同
煙草の火借りる五の稲の出来　同　同
恐妻と知られてからはうまが合い　同　同
図書館の隅浪人と云う欠伸　同　同
四十の恋はふところねらわれる　同　同
餞別で派手に太平洋を飛び　同　同
楽園はなくとも我家の虫時雨　宇部市　上林　粗影
愛情を温めるに尊き布団かな　同　同
敬遠されだしてから蓄た株と金　同　同
こおろぎよ俺の世帯を見て啼くか　同　同
対角線の恋のまま二人の並木路　同　同
売薬で済ます病気に祖母あわて　同　同
大学出おべんちゃら今修業中　芦屋市　里田一ン十
古稀祝孫の行儀に気が疲れ　同　同
電化して児童画に汽車影を消し　同　同
流行はハンドバッグも網に入れ　同　同
芹山で開く組合役員会　同　同
芹狩りは転んでも酒さし上げる　同　同
今日の手形落せば明日が待っている　高知市　須藤　俊江
台風より手形がこわい小商人　同　同
犬の値をきいて人間淋しがり　同　同
味噌汁の味変えてみる倦怠期　同　同
命だけ助けてくれた破算なり　同　同
松虫が裾で鳴いてるランデブー　同　同
手帳から出す都々逸に三味坐る　奈良市　吉田　凡茶
応援歌根気のよさを見てもらい　同　同
白砂青松詩情どこまで歩く気か　同　同
お天気を褒めて朝から集金屋　同　同
うどんやののれんの奥のいい返事　同　同
温いこころをごつい掌に感じ　高砂市　吉原　紅月
新の足袋帯が結べぬ娘に見えず　同　同
制服貸与サラリーの安いこと　同　同
遠足の子へ噴水の虹が立ち　同　同
テレビ囲んで何の不足もない茶の間　同　同
強制やないでと寄附の話する　鳥取市　北村　三歩
万病に効く信心をすすめられ　同　同
天高く財布は底をついたまま　同　同
人事課に呼ばれ四角い返事する　同　同

演芸会

小道具のピースそのまま喫いつづ　同　菊地　紀久
進まない恋を理性のせいにされ　東京都　同　同
親孝行しとく挙式の日が近く　同　同
嫉くな嫉くなと妬かせるようにしてもいて　同　同
さりげなく恋人の月給聞いて見る　同　同

雑筆春秋

座談会こぼれ話

正本水客

6月号の〝水客を語る〟で云いたいことを云われたので、私も語る方に回ってみようと「潮花、紫香を語る」記事を読み返してみた。

潮花君の方は、先生と葭乃、梨里、良子さんの女性群にかこまれている処、いかにも同君らしい。メンバーに紫香の名がないのは稲の一面が抜けてる気もするが、さすが路郎先生は人間をよく観ておられるとしみじみ思った。表面やさしそうでいて、大きな実行力を持っていることは敬服に値する。

紫香君は生れつきの口下手を、機会ある毎に挨拶や司会を買って出ては喋ることを意識的に練習していた。人前で物を云うことが極端に嫌いだった私が、曲りなりに話ができるようになったのは、選句披講のおかげと同君の感化に因るところ大きいと思っている。

キチンと座っている時の水客は「矢がつっ立っているような」という葭乃奥さまの感覚的な表現に対して「鶴が立ってる」と平凡き

無口だが彼女とならばよく喋り　同
寝てる子を起して来たに風呂屋スト　岸和田市　津田　千舟
五千円札で二号の機嫌とり　同
サロンパス代もいれとく仕立賃　同
よろめいてもよいかと妻におうかがい　同

退院して

待って居たよう女房派手になり　同
一本松の孤高を愛し鶴の如　守口市　大谷　月都
飯粒で封した無心の手紙が来　同
大ジョッキ肺活量の順に置き　同
勤続の額が一枚あるばかり　同
呑み過ぎの小銭の音が嗤うよう　同　村上　旭童
豊作の予想は金で見つもられ　愛媛県
本当の百姓もいる委員会　同
がらくたを捨てて嫁さん来る仕度　同
秋の夜は長し夜釣の竿へ露　同
台所改善やはり菜ッ葉たく　同
中性化して浮気を口惜しがり　岡山市　宗高矢寸志
無遠慮の帰りは下駄を変えて去に　同
お名残り惜しいわと転勤払わされ　同
理屈屋と呑んで相槌ばかり打ち　同
金持の細さを見て感激し　同
爺ちゃん爺ちゃん云うて恩給皆とられ　岡山市　江国　幽谷
立退きの通知へ六法繰って見る　同
置薬のんだ挙句を医者に見せ　同
山海の珍味とやらに胃をこわし　同
本降りと見て蝸牛動き出し　同
急ぎますからと別れてパチンコ屋　石川県　同村　虹要
もうけ口ありまへんかと寝そべって　同
やきもちに油さすよなみくじ出る　同
職場結婚へそくり出来ぬのに困り　同

老いらくの恋サロンパス匂わせて　同
するめにも抵抗がありそり返り　大阪府　丹波仲字呂
金銭に触れて女の芯太く　同
うらやんだ隣へ同じ督促状　同
七人の敵斬り伏せて大ジョッキ　同
ラブシーン刺戟少ない過去思う　同
空の青さにさぼりたくなり　大阪市　広瀬　挽郎
残念賞というバッジをつけられる　同
御協力をお願いされないのも淋し　同
目を閉じて見ても劣等感去らず　同
計画に埋れたままねむる秋　同
客二十熱弁ふるう紙芝居　堺市　赤塚　楽天
老幹事二級酒まぜるこつも知り　同
夜食する嫁へ姑の咳が派手　同
米びつをのぞいているも里の母　同
附添が美人で別の熱を出し　同
壁と向く夕餉の膳の味気なし　大阪市　板東千代美
曼珠沙華真赤に咲いて嫌われる　同
淋しさがおそいかかって撥を置き　同
招かれて行くお化粧は地味に塗り　同
稲の穂も帰って来いと招く秋　同
半袖の背広男に欲しくなり　大阪府　谷沢　好祐
あっちでは共学白と黒のこと　同
雀追う音ポンポンと秋を告げ　同
タケ狩りのほんとに生えた二三本　同
落書は禁止の札に迄書かれ　同
袷着て単衣の線をなつかしみ　豊中市　石川ひさみ
ビルの影わたしへ倒れて来そうなり　同
玄関は尋ねて呉れる音もせず　同
君が代はいいな私も日本の子　同
掌で雨をうけてるまちぼうけ　同

わまる比喩を並べたのは潮花君の〝没〟である。

それにしても、この坐談会、誰かれとなく愛妻家を押しつけているのは微笑ましい。

潮花の巻

空はよく晴れていた。校内対抗野球は味方不利のまま最終回に近い。専らスコア係の潮花君が、珍しくバッターボックスに立って、安打が飛んだ。辺りをへいげいしながら同君は意気ようようと走り込んだ——一直線に三塁をめがけて。

紫香の巻

海老や蟹が好きなくせに、食べると必ず腹痛を起こすというノイローゼの持主であるが、ごく小さい頃から鰻が大好物だった。ある時、兄さんに連れられて盛り場へ出たが、いつもは出雲屋の鰻むし

他人とは思えませんと借りがあり　佐野市　干鰯谷和子
持てるだけ持って襖を足であけ　同　岡島　孤舟
法科出て結局八百屋を継がされる　同　岡島　孤舟
虚勢ふと見抜かれそうな目に出逢　同　岡島　孤舟
花鋏今日はドライな音で切れ　大阪府　岡島　孤舟
旅先の仲居にもてた事も云い　同　岡島　孤舟
幸福は妻がたたいてくれる肩　同　岡島　孤舟
新調の背広ではいる蒲鉾屋　同　岡島　孤舟
商魂の旗があんなに濡れている　大和高田市　岩垣日本村
オートバイ女を乗せている速度　同　岩垣日本村
後手で歩き暇かと尋ねられ　同　岩垣日本村
首を巻く繃帯にさえ嘘があり　同　岩垣日本村
ダムの村炭も焼かない程景気　熊本県　淵川　秀敏
牛叱る声山彦になり淋し　同　淵川　秀敏
流感が袋のねずみ程迫り　同　淵川　秀敏
発車ベル泣いて別れる人も来ず　同　淵川　秀敏
男なら読書の秋を編みつづけ　玉野市　則田水鏡子
陳情の旅で靴だけ減らして来　同　則田水鏡子
禁煙と云う字が読めぬ訳でなし　同　則田水鏡子
金の要る話になって酔がさめ　同　則田水鏡子
村祭酒の肴は稲の出来　笠岡市　出原　真奇
マンホール出れば人間らしくなり　同　出原　真奇
娘の汗がきれいに見える阿波おどり　同　出原　真奇
空腹へぐっとこたえる妻のヒス　同　出原　真奇
酒の気が切れると肝臓気にしてい　大阪府　藤本　幸永
夕焼は壮厳すすき揺れやまず　同　藤本　幸永
姉の娘は便りの度に子が産れ　同　藤本　幸永
社の野球疲れ直しが高くつき　同　藤本　幸永
オシッコの形だけ残し里帰り　大阪府　沢田　美喜
一寸かけて見たかったのと電話　同　沢田　美喜
百八十度の転換とやら恋がさせ　同　沢田　美喜
モナコ女王夢見ていたら嫁きおくれ　同　沢田　美喜

別れ途修道院へつづく道　岸和田市　内藤きさ子
遠慮した咽喉とは見えぬ炭坑節　同　内藤きさ子
並木から春が来るまた秋が来る　同　内藤きさ子
秋深し隣もオヤツふかし芋　山口県　安平次弘道
バス代前納雨の紅葉もおつなもの　同　安平次弘道
拇印より三文判のいる役所　同　安平次弘道
恐妻家煙草銭しか持っとらず　岡山市　光好　陽子
葬式の事まで吝しょく云うて死に　同　光好　陽子
人間も顔まけをする猿のボス　同　光好　陽子
みな知っているのに人眼しのぶ恋　愛媛県　槇　水泡
手ぶらでは行けぬ家から来い来いと　同　槇　水泡
整形科受付見本らしい顔　同　槇　水泡
かもじやの前を通ってぎょっとする　岸和田市　安平次弘道
酒のんでいただけ事故が不利になり　同　中野三四郎
並木もう黄色く式の日が迫る　同　中野三四郎
胴巻から十円出すのに骨がおれ　大阪市　寺杣　花車
ボチボチがマアマアになった小商人　同　寺杣　花車
告白に行って雑談して帰り　同　寺杣　花車
公益社踏み倒されたとも聞かず　貝塚市　杉本　一鶴
右総代とびがたかの子生んじまい　同　杉本　一鶴

水間寺お夏清十郎の墓にて

凶と出たみくじ二人の手で結び　同　竹内　千里
松茸とさんまを連れて秋が来た　大阪市　竹内　千里
古傷もまたなつかしい同窓会　同　竹内　千里
足弱を嘲笑けるようにバスが行き　同　鎮浪　錦花
スト出来る身分を失業者の恨み　宇部市　鎮浪　錦花
金魚屋をのぞく夫婦に子がおらず　同　鎮浪　錦花
女子大を出てもやっぱり米をとぎ　同　関戸宗太郎
主義主義心にもないことを云い　小松市　関戸宗太郎
しびれてる足が袴の裾を踏み　同　関戸宗太郎
野球部は月月火水木金金　同　関戸宗太郎
眉書へワイ談かしこまって聴き　貝塚市　護川　梢月

ヒゲソリ後に
アストリンゼンは世界的常識！
1 生々した男性美をつくる
2 爽快でヒゲソリがたのしい
3 新強力殺菌剤G11配合で一層強力！
明色アストリンゼン
桃谷順天館

を食べさせてくれる兄君、その日は経済的原因によるものか、その前を素通りしようとした。幼にして労資協調の妙を心得ていたと思われる同君は耳元で呟いたもんである。

「兄チャン、トトゴハン食べさしてえな、トト無うてもだんないさかいに……」

水客の巻

私は動物園にいた。らくだが馬鹿に気に入って、手をウンと伸ばして餌をやりにいった。らくだの方もゲッと首を下げてきた。そのタイミングが完全に一致したからたまらない。バックリと口の中へ腕がはいって了った……。今でも傷跡もなく私の腕が完全にあることからして、らくだとは雨を持たない動物であると信じるようになりましたとさ。めでたし、めでたし。

よろめいて見たい日もあり倦怠期　同
ロマンチックな名とは違った花が咲き　同
宝くじ当ればベッドも楽しかろ　貝塚市　阪東阿季良
むつかしい世界と知らず呱々の声　同
病床へ鉛筆なめた文嬉し　同　吉本　よし
千鳥足白ナンバーに手を挙げる　西宮市　同
燈籠も電化になった灯がともり　同　傍島　静馬
お説教へ信者批判の目を持たず　同
オートバイ乗せてもろうて肩がこり　神戸市　同
五千円札になってチップは別に持ち　同
丹精の菊チャンバラで首が飛び　同　小島さぎす
ハンドルを信じて渓谷美にみとれ　大阪市　同
橋の下おやおや自転車持つ生活　同
奥さんも表札あげた働き手　同　木山　遠二
治るのを急がずせんぶり呑んだ居り　笠岡市　同
簡素化を又甘党が唱え出し　同　木山桃仙坊
読み書きの代りか唄に才があり　同
秋晴れを金のいらない山へ行き　笠岡市　同
長生きはしたし作った星が飛び　同　藤川沙智子
転勤で去勢をされたようになり　同
好きな色から減って行くお菓子　京都市　同　藤内千鶴美
ふるさとは思いきり酔う酒があり　同
聞いてやる片手は涙拭いてやり　同　仲野花鶴美
味気ない別れいつまた逢える人　大阪市　同　杉本たつよ
こんな時坐禅組んだらなと思い　同
雨よ降れ蛇の目で逢える人が来る　同
落第をしても家業は継ぐ気なく　天理市　同
たよりない返事で父となる話　同
余興だけ出席しとく婦人会　岡山県　同
稲を刈る畦に秋刀魚の荷をひろげ　同
張り替えた障子へ秋の祭が来　同
箸に諸さして子供を呼び集め　同

旅便り脱線中ですとは書かず　大阪市　米浪進之助
読経する尼僧の声も秋の色　同
交番の時計止まったまま正午　同
社の平が抵抗ジャズを高くかけ　今治市　越智　義夫
靴紐がゆるんだ程待ち待ち呆け　同
神棚の隣りの棚でラジオジャズ　同
その実は見舞に欲しいのは清酒　岸和田市　植山　武助
社長秘書クラブを磨く用もあり　同
子供等の為に再婚すると父　同
競輪へ棄てにおじゃれの無料バス　尼崎市　徳永　鬼美
継ぎあてる齢へ絆創膏を貼り　同
人形を並べて男みんな嫌　同
子が育ちおやじ二階に間借りめき　出雲市　同　石橋万古人
のうのうと末っ子キングサイズなり　同
学資金続いて就職運動費　同
ポケットを妻は税関程調べ　玉野市　同　伊原　明林
恋人が出来て始めるペン習字　同
お役所の昼の長さを見て帰り　同
住職が病気見舞に珠数を持ち　熊本県　同　松井野狸翁
旺盛な食欲でアイフ手離さず　同
菊作り歯科医はあまり流行らない　鳥取県　同　鈴木村諷子
寄る年はパーマかけても踊っても　同
縁談にドライもしばし猫のよう　石川県　同　高瀬　幸路
勧誘を受けた株だけよく下がり　同
やみ米の値で豊作を踏んで見る　福岡県　同　阿部たけし
女子寮の塀コスモスを覗かせる　同
マスコット揺れて車掌も客もゆれ　出雲市　同　板倉　三文
大学を出したに暖簾にそっぽ向き　同
鏡覆い源氏名のまま母となり　愛媛県　同　河本南牛子
売られ行く米へ新装付けてやり　同
覚悟して出て来た年増持てあまし　高知県　同　高橋　蟠蛇
客筋が良うて料理屋いつも閑　同

忘れさせない

伊達　堰子

阿倍野ターミナルの、とある一寸一杯屋で偶然、豆秋さんと御一緒になった。数カ月前にもここでお逢いした時、近くの五十五円の映画館へ（飛田）へちようど「雨情」がきていたので、どちらが誘うともなく、二人で観に行ったことがあった。その時の話がなにかの拍子に出て、豆秋さんは、

「あの映画の主演者は別として、潮来の老船頭に扮した役者が強く印象に残っている。あの風ぼうと舟を操りながらの話ぶりなど、ホントの船頭になり切っていたが、今だにそれが忘れられないね」

株式会社 ㊐ 丸越

瓦斯電気器具
雑貨
洋装品
靴鞄
家具
呉服
婦人服
紳士服

良い安い買よい　十ケ月払
月賦のデパート

大阪市阿倍野区阿倍野筋三丁目六〇
電話 天㊥ 3957・3978
大阪市住吉区長居町三五
電話 住吉㊥ 4985
大阪市東住吉区平野新町三丁目一
電話 東住吉㊥ 2110
大阪市都島区都島本通三丁目三一
電話 堀川㊥ 7479
堺市熊野町東一丁一
電話 堺 3587

アベノ店
住吉店
平野店
都島店
堺店

私用で飲む酒はきちりつりを取り　大阪市　中田　洛風
祝盃とやけ酒スタンドへ並び　同　藤冨　淀月
献立表見ても委しておく内気　守口市　同　位守正柳子
マネキンの生地を二ヤール五分切らし
倖せな叱言8ミリあきらめる　小松市　同　尾井　乙三
まだ伸びぬ雑木にもふれ病み続く　小松市　同　樋口　舟遊
超勤は汚職に遠き灯をともし　西宮市　同　永吉　喜好
受胎講習おとこが聴いて豚の事　宇部市　同　村井　城南
田を売って家主でたべる家が立ち　大阪市　同　河井　庸佑
グループは紅一点に押されぎみ　貝塚市　同　山内　俊見
うさぎ追いしああの山もダムの底　宇部市　同　平田　実男
無免許のくせにポケットなど探し　金沢市　同　山田　圭都
御近所の噂は欲な石の門　広島県　同　橋本　雅巣
里へ行く心雨風にもめげず　大阪市　同　神田　豊年
洗濯機も買えずテレビの話出る　大阪市　同　土守　蜻蛉
くやしさに勝をゆずったように云い　同　佐内　隆文
しぶ柿のかぶりつきたい色にうれ　山内　俊見　同　冨永　建朗
追加した酒が雰囲気ぶちこわし　同　塚脇　笑太
目もとまで刑事刑事になって来る　同　竹内花代子
貧乏へ政治味方をしてくれず　同　満生　拝山
外国と文通切手が欲しいらし　同　友保　斧平
社交家と云われくせ者とも云われ　同　宮政　周防
故郷を離れ土産が重うなり　同　木山　二路
観光バスまだ見足りない顔が寄り　同　関　すゞ女
失業の自慢話は鰻釣り　同　島田　雄峯
食うことに女一日暇がなし　同　岸川　漣
新聞を読み散らかしたまま男　滋賀県　同　室井八九寸
両親の写真の下で妻お産　同　長沢やせ男
新婚のホテル平和な霧がまき　笠岡市　同　三上　春雄
外見を捨て主演の吾子に拍手する　同
正直が得した話は記事になり　大網市
金の番さすにはおしい養子なり　同

肝腎なところをぬいて後日談　京都市　同　竹内花代子
才能を生かすに金の世話になり　同　満生　拝山
むっとする言葉は腹の中で受け　大阪市　同　友保　斧平
阿呆になることもいいなと思う歳　同　宮政　周防
葬式で会って互に釣自慢　ハワイ　同　木山　二路
年取ってから女房を連れ歩き　同　関　すゞ女
友引をかつぎ霊棺ちとにおい　ホノルル市　同　島田　雄峯
出しゃばりのメーンテーブルに並ぶ顔　同　岸川　漣
禍も福も来る日来る年神任せ　ハワイ　同　室井八九寸
嫁のミス姑が秘めて無事な家　笠岡市　同　長沢やせ男
天高しえさははるかにまだ高し　笠岡市　同　三上　春雄
いそがしゅう云うて化粧は念が入り　水見市
かあちゃんと呼ばせてマダムは世話が好き　水見市
フェアリイがさすのさき少女等合歓の蔭　大阪市　同　川竹　松風
無礼講なぞと社長も酔うて居り　大阪市　同　木下　一休
故郷をすてた理由の人も老い　大阪府　同　松島　光一
工場の怪我は傷口なめて済み　大阪市　同　林　昌男
しあわせは女房が笑い子が笑い　高知市　同　室井八九寸
貰い泣きしても力にようならず　高知市　同　長沢やせ男
妻はもう一年掃除などしてくれず　和歌山県　同　三上　春雄
鍼灸に頼る夫を淋しがり
癒りさえすればと職場冷たすぎ　西宮市
とりいれの傍をマラソンが続いて来
テレビの原子炉見ながら蚊に喰われ　大阪府
国立の秋をカメラに入れて来る
前略とかしこの中でもだえぬき　田辺市
先生の頃の鞄で来る保険
鉢巻してやれば坊や酔ったふり
司会者を煙に巻いて残念賞　堺市
心まで病んでは居ぬとやせ我慢
手土産の派手に善意をうたがわれ　福岡県
札束で開く裏門を教えられ

川柳雑誌社特製
投句用　柳箋
一冊（五〇枚綴）三〇円
送料（一冊分）八円

雑話二題

木村十悟

阿倍野の火葬場、火葬場といえば阿倍野というほど、大阪の阿倍野は有名である。その火葬場が大阪が大きくなるにつれて、瓜破まで路線延長になって、終着駅は瓜破になり、えらい遠くなってしまった。

終着駅が延長になれば、人命も延長せんと勘定に合わんことにな

「私はあの嫁入舟が行くとこが好きでした。枯すすきの歌がはいるとこ、良かったな、忘れられない」実際に私は三べんも観ました。こんなことあの役者がきいたら、喜ぶやろうと、豆秋さんもおっしゃる。

川柳もこんなことが云えるのではないだろうか。いつまでも記憶に残るような句、つまりいつまでも忘れさせないような句を残さなアカンと思う。

「しっかりやり給え」と、豆秋さんが一ぱい酌ぎながら励ましてくださったが、なかなか生やさしい道ではない。

一枚のすだれ女を昼寝さし　西宮市　塚田　東雲
この苦労笑い話にする日迄　同　村上　道草
腹時計名曲鑑賞落着かず　西宮市　同　三上　芙路
絵はがきで留守居の妻に機嫌とり　同　上岡　一藤
湯の香りなまり言葉が親しまれ　西宮市　同　田口　一瓢
湯の町へエクボで揺れるバスの中　同　能村　唐衣
虫の声泣き声と聞き歌と聞き　西大寺市　同　高野むじな
その足で田圃見廻る旅帰り　同　青柳扇子仙
家具すこし置き換え心はずむ妻　熊本県　同　小田　柳叟
天下泰平親子リレーへむきになり　同　亀崎　漫歩
草鞋はいた頃を百姓もう云わず　金沢市　斉藤　巌
駄菓子屋の返事障子へ影が立ち　出雲市　加藤　虹路
ポスターは金持て来いと招いてる　新潟県　二宗　吟平
恋文の切手を弟呉れと云う　石川県　越智　一水
脚線美などわかれへんうちのひと　大阪府　暁　ゆたか
内心は虎視耽耽の記者クラブ　石川県　桐谷　紋六
頼まれた店番値札見ては売る　貝塚市　橘　十四呂
誘う水ないか終業ベルが鳴る　鳥取県　酒井　丹謡
でるとこへでると家主におどかされ　石川県　遠山よし子
算盤を無視したパパの味加減　出雲市　石居まさ子
予告して来た台風に手が出せず　岡山県　塩飽　素峯

映画智恵子抄みて

ハンカチで足りぬ涙の智恵子抄　今治市　井上美恵子
癒る日の近い食欲励まされ　石川県　天瓜粉親父裸でかしこまり　奈良県　秋田　好子
酒瓶へ醤油を買うて世帯染み　金沢市　たとえばの話真綿で首をしめ　松山市　松木　窓城
打ち寄せるこがねの波に乗る御輿　善通寺市　発表会名言を待つつばをのみ　河内長野市　森本黒天子
老妻は一杯だけを酌いでくれ　西宮市　スキーヤとは粒が違うているゴルフ　河内長野市　大杉　春吉
油乗ったとこやでなあと惜しがられ　兵庫県　自転車に祭の匂い乗せていに　兵庫県　斉藤たけお
めかす手がふるえる夫帰るの日　東京都　肺癌の記事を読みつつ火をつける　大阪府　横田　放人
親子孫三代リレーでどっと湧き　笠岡市　秋晴れに日曜大工屋根の上　七尾市　松高　秀三
五年振りの友に独身うらやまれ　大阪府　ブリンナーになりきる迄は帽子のせ　福岡市　本村珍ちく
柳腰今はドライの落下傘　名古屋市　つりランプ時代の恋とくらべられ　児島市　鎌田　銀子
マスカットキッスするように舌にとり　貝塚市　逢えばもう時間気にする恋であり　広島県　平田　越舟
若い衆に負けん気はあり神経痛　堺市　細川　千草
灰皿のすいがら隠す二号宅　大阪市　千石　快人
がみがみと云う友情に助けられ　大阪市　田中　狂二
雨の予報あたらず今日のこの人出　伊丹市　安並　十七
豊作がやや良平年やや不良　笠岡市　島田みのる
妻一人肥えて病夫へすまなく居　伊丹市　小川静観堂
袖カバーして居る程に働かず　大阪市　谷本鈍愚坊
税務吏が居て三十分の長い事　大阪市　西沢　堅持
悪童の影さえ見せず成人し　岡山県　堤　勝三
子の為に自説を曲げるつけ届け　大阪市　吉川　悦子
一人行く砂丘は冬の風が吹き　岡山県　杉田　明美
魚屋へ払うに惜しい折目なし　小松市　福田　祥男
サロンパス貼って編む手は又つらく　大阪市　万仲　一進
落ちぶれて畳のへりにけつまずき　八代市　小竹　史子
集会へ昔地主の顔で来る　山形県　永松　道雄
男の子ほしさに女四人産み　玉野市　菊地　白葩
インフルエンザ将棋だおしにたおれたり　松江市　小谷　仙山
秋茄子のとろける味覚秋を知り　大阪市　岡崎　祥月
退職してから雑様々で生きていき　奈良県　中谷ハナ子
木村よしを

る。その延命薬は川柳にかぎるということを私は最近発見したのである。よきかな川柳。

○

妻「赤の73番から（中央市場）電話かかってましてン、帰えらはったらスグ電話くれというてはりましたで」
私「ほっとけ、かめへん、かめへん。それより早よ寝間敷いてんか、昼寝するワ」
——電話のベル
妻「また73番からでっせ、留守や云うときましょか」
私「ウン、留守や云うといて」
この時、フト新川柳鑑賞にのっていた
受話器押えて留守だと言い
まひよか　（高志）
の、名句をおもい浮べて、高志氏のこれは実感の句だなと思ったことである。

心斉橋筋大丸前
電話㉗三三四四番

川柳家の二十四時（17）

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の銚子の数や食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生活断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。 ―編集局

京都市 **布部幸勇**（ぬのべ さちを）

★一時――生れて育ったのが花街先斗町のどまん中、寝間へはいるには早い。

★二時――酔うたあとの「うどんの味」をいつもの夜なきのリンに頼る。よく寝ている家族に気づかれぬように呼びいれてお鉢に盛ってもらう。この湯気に私の睡眠をうながす作用あり。

★三時――寒暑ともに裸で寝る。夢を描いて寝る。週刊誌二、三頁でコロリ。

★四時――生きている電柱。

★五時――東山智恩院の鐘をきくこと年に三、四度。これは何か心に変事のある時と知る。

★六時――夢をみるのはこの時間夢にはすべていろいろの女性現わる。

★七時――きまって枕もとの冷たい番茶を約一合特別大きい湯呑みでぐっとやる。うまさ格別。

★八時――前の小学校のサイレン日曜は休み。このサイレンを夢幻境できき、そのあと、カラスの鳴くのは凶。ピイヒョロヒョロとトンビの囀りの日は吉事ありと、私のこの朝の運勢は一日の気分を支配する。

★九時――起床。顔は洗わず、孫二人を起して「お早うさん」を明るく言わせることに確く決めている。新聞三つ。乳とパン一つ。

★十時――印刷業経営主として小さい工場に出る。電話、予定、注文、配達、原稿整理など多忙を極む。三人分の仕事を独りでやる。

★十一時――郵便の第一便着く。税務署以外の通信をみんな楽しいものにする。

★十二時――ひる休み。昼食せず週に一回は京都新聞社のための川柳作句十句。二百行ほどの原稿にかかる。この日一日は「不在」のウソを吐く。

★十三時――**十五時** 生活のための戦い。土日曜以外は家業の鬼となる。

★十六時――孫（男の方―五才）を連れて風呂へゆく。ヒゲ剃らぬ日なし。帰って軽く昼食。手紙の返事、原稿、作句、その他文筆アルバイト。

★十七時――三百六十五夜とも外出するに決めてある。洗心会（仏教研究）冠句（作句編集）邦楽（小唄、うた沢など）映画（月に二回限定）落語（上方落語の会）その他に川柳の会や仕事いろいろの会や原稿の打合せなど各方面に折衝をもつが結局は「酒」がその夜のザ・エンド。

★十八時――**二十三時** 私の別号「布部寸刀」の仕事は主として夜に重点をおいてある。

★二十四時――たった一人の酒をたのしむ場に尻をおく。この場一定せず。雰囲気によって移動させるが、一晩一場所独酌を実行。酒場の灯をぬけて高瀬川ぞいに、靴の底だけが知っている二十五時のわが家へいそぐ。

広島市 **森脇幽香里**（もりわき ゆかり）

★一時――たまに起きている時もありますが大方は睡眠中。

★二時――まだ眠っています。

★三時――大きな音がしなければこの辺も眠っています。

★四時――外がしらみかけると小

みんなの暮しが明るくなる
セキスイのプラスチックス
積水化学
本社 大阪市北区宗是町1

ホノルル市

前山北海（まえやまほっかい）

鳥のように眠が醒める。

★五時——床の中で思索しているとヒントが湧いて来るので、

★六時——起きて書くこともあります。

★七時——朝食の支度にかかります。

★八時——朝御飯を一番おいしく頂いております。

★九時——

★十時——掃除、洗濯など川柳の仕事が忙しい時は翌日廻し。来信、返信の整理。

★十一時——ごたごたいろいろ、外出等不定。

★十二時——お酒は飲めません。昼食は軽くすませます。

★十三時——読んでいたり、書いていたり。

★十四時——人が来ていたり、外出していたり。

★十五時——

★十六時——別におやつは頂きませんが、お客様のおしょうばんでよく食べます。

★十七時——夕食の支度に掛ります。

★十八時——

★十九時——

★二十時——冬にかけては煮ながら、話しながら、ぬくもる夕食にします。この頃から柳友の誰かが見えますので、夜はもっぱら川柳の話で更けて行きます。

★二十一時——

★二十二時——電車がなくなるので、皆さんが帰って行かれるのが十時過ぎ。

★二十三時——

★二十四時——床に入って自分の体になって、週刊誌を誌むのが一番たのしみで、一頁を読まないうちに眠っています。

★一時——熟睡。

★二時——

★三時——

★四時——

★五時——

★六時——起床、アミデント薬綫素入り練歯磨で歯を磨き、パームオリブ石鹸で顔を洗い、安全剃刀で剃る。日語放送をかけ朝刊英字紙を読む。朝食は果物、ブラック・コーヒ一杯、ベーコンエッグとトースト二片、バイサン綜合ビタミン三錠を服む。

★七時——少し過ぎ出社。

★八時——他紙の広告を調べる。

★九時——調査又は企画を練る。

★十時——広告先訪問、資料蒐集

★十一時——

★十二時——帰社、昼食は持参の弁当、飯は茶碗一杯程度、果物を食べ、番茶を飲む。木曜日は午餐会に出席会食する。

★十三時——夕刊英字紙の広告を調べる。広告の文案を書く

★十四時——広告先を訪問。土曜日はKGMB局日語放送二十の扉へ回答者として出席する。

★十五時——訪問又は企画。調査土曜日は家でKGMB局日語テレビを見る。

★十六時——帰宅、途中時に友人訪問又は買物をする。日本から届く柳誌又は音信が愉しみだ。日曜日は出社せず、午後集会の無い時は終日家に居て、戦時から終戦後滞日中蓄積の書類や資料整理、新聞の切抜き、手紙又は原稿書きに没頭する。

★十七時——

★十八時——入浴後夕食、晩酌はやらぬ。飯は茶碗一杯半、お菜は和洋支折衷、肉魚は少量、生野菜と果物を食べ、冷水、バイサン綜合ビタミン三錠を服む。月数回趣味、社交又は社用交際会合出席の際は交際酒は呑む。

★十九時——

★二十時——

★二十一時——週一回日本映画を見る。日英新聞雑誌を拾い読み句作、添作、原稿、手紙を書く

★二十二時——テレビ・ニュースを見て書き物を続ける。

★二十三時——就寝。

★二十四時——熟睡。

煙草は喫わず、間食はしない。

アンケート あなたの家から —何が見える

青楼が見える

大阪市　**市場沒貪子**

二階の裏、北横が待合料亭、所謂青楼です。遊んでいる人が丸見えです。宵の間は神妙に呑んでいる彼氏等も家内中がいざ寝ようとする頃から、三味線も派手になるし太鼓も鳴り、唄うやら踊るやらで、賑やかになります。冬は雨戸と硝子戸で幾分防音出来ますが、夏はたまりません。僕の眠剤を服む癖も一つはここに原因があるかも知れません。どの客も唄が下卑て来ると帰る前ぶれです。以前のように徹夜騒ぎの客は近頃は減りました。多分招待客が多い為でしょう。子供に環境のよくない家です。

宿舎街

広島市　**国弘半休**

正直に言って私の宿舎は市の東方に位し南向きの玄関に立てば前も横も同形の宿舎ばかり、西と西北が畑地のため西の窓から比治山のテレビ塔北西の縁側からは遥か彼方に海田の山山、少し下って町工場の煙突更に下って商家の屋根、家と畑地の間を南北に国道が走り近代的諸車がばく進する。このところ都心の皆さんが騒音に悩まされて居るのと変らない。大空への視界も一応開けては居るが機関区の煙に蔽われて未だ人工衛星の正体を見ず。併し乍ら夜ともなればこうもりの現れて蚊軍を追う。ついこの間のことであった。

七面山の山波

岡山県　**直原七面山**

山の中の田舎家のことで、興味をそそる程の風景は見当りません。青い青い空、秋色漂う山と山、時々刻々刈り取られてゆく黄金の穂波、実一つない柿の木、そして瓦とわらの交さくした家波、朝から晩まで望遠鏡を覗いていても、映画〝裏窓〟の様な劇的シーンも見付かりそうにはありません。右方の山上には遠く仏教寺の三重の塔が見え、左につづいて間近く、幼ない子供達に夢をあたえる紙園様の、森と社と鳥居が見えます。そして更に首を左に振れば、所謂七面山の山波が美しい雄姿で天空を圧しています。

何んでも見える

小松市　**伊藤茶仏**

戦前は閑静だった私の家も戦後近くに酒場が多くなり、夜ともなれば酔客の放歌に、安眠を妨害されることが多い。

東は家の裏側で二階の物干台から秋晴れの白山が白い嶺をみせてくれる。北側は突き当りに、当地一流の料亭「なにわ」の表玄関がデンと構え酒場が「みどり」「二葉」と手前にみえる。向側には「天政」「小菊」「サントリバー」「明星」と軒を並べ西側に松竹専属の小松館がみえる。私の向いは当地の名内科医の堂々たる本宅がある。言うなれば都心に近い私の家から何んでもみえる。

心眼開けば

京都市　**田中烏雀**

おしめが干してあるのが見えると云えば川柳になろうが。

心眼を開けば、何んでも見える。政治家は私腹を肥やす為に腐心。労働貴族は私利の為に愚昧なる労働者を踏台に煽動、ジャーナリ屋は己が悪の正当化をわめき、教育家は偽善と権力に媚び、宗教家は堕落の道を走る。末世地獄図絵。不満なる人民は、文化低く、己が金をパチンコ機に吸われている。おや向の屋根に腕白が威張ってる。下でお茶ッピーが其の靴を隠す。

安ものは仲間が多い熱帯魚

（鳥雀）

黒い屋根

大阪市　**丸尾潮花**

私の家から見えるものは、黒い都会の屋根と、風呂屋の長い煙突、油煙のとまった物干の竿竹である。時たますじ向いの天理教の踊りが見える。無我の境地に入った様なその踊りをしばらく窓から見ている時もある。またその楽の音がたまらなく心をいら立たせる時もある。表通りの看板屋の物干で、毎年秋が来る度に咲いて呉れるコスモスの花の可憐さが、たまらなくいとしいと思える日もある。月の光に濡れた黒い都会の屋根が眼の届く限り無声映画を見る様につづいている。毎日毎日こうした変らない眺めの中に、変った姿を見せて呉れるものは、雲と月の動きだけかも知れない。私が月へ向く時はたまらなく心の底は淋しい。そして月へ向く日は耐えず、ひとの面影を追いつづけている、逢えないひとの。消防車が走って行くことも生野区ではめずらしくない。その度びに一家で物干に馳け上る。暗い夜空に火の粉が舞い上っている。御近所のざわめく声がする。私の家から見えるものはこんなことだろう。火の用心、又冬が来る。

面影をまたこわされた消防車

書は遊園地夜は逢引場所

倉敷市　**椙原一善**

さて何が見えるかな？　家の地続きに子供の遊園地がある。ブランコとバックネットだけの空地だが、子供達は毎日元気に遊んでる小さい子は泥んこになって転げ廻って居る。親達がたまるまい。野球では時々近所のガラスが被害を受ける。女の子はブランコ、これ又はらはらする程大振りをする。此の遊園地も夜と共に若いアベッ

コーヒの味

モダン川柳

心斎橋大丸北の辻東へ

御門

TEL ㉗ 6684

御集会には階上御利用下さい

クさんの逢引場所となりブランコも彼女達の黄色い声を乗せる。あまり世間を見ぬ私は川柳の素材をここで見つける。有難い所である。私の旧作に

母さんの眼はブランコに乗っており

天満宮の森

大阪市　**後藤梅志**

東方（三百米）に紹鷗の森天満宮の楠の巨木が見える境内は楠ばかり十八本樹齢は四百年という代物。ここだけが粋人墨客が杖をひく手がかりになって居り、太閤の遺跡である。忘れもせぬ十二年前三月十四日、空襲の業火が西成から阿倍野へかけてよく拭き込んだ中産階級の住宅地を一嘗めにしたが、南部一帯はこの森に遮られ助った。人人は天神様に助けてもらったと云ったものだ。その時の焼爛れた姿も樹の生長は早い、元通りになりツグミやフクロに宿をかしている。私はこの天神の森から帝塚山へかけての起伏が好きで、よく散歩に出掛ける。

大山の雄姿

米子市　**小西雄々**

玄関を出ると海抜一七一三米の国立公園大山の雄姿がすぐ眼の前に見える。春の若葉、夏の登山、秋の紅葉、冬のスキーと四季を通じて大変な賑いだ。「秀麗比なき大山」と必ず校歌にも歌われ米子地方の人人が狭い山陰に育ちながら物事にこだわらず潑剌たる精気が溢れているのは毎日大山を仰いでいるからだと言われている。私も作句上スランプになると大山を眺めることにしている。古い文化財も豊富で高原ホテルもできた。

大山の雪を仰いで冬仕度　（雄々）

家がぽつぽつ

岡山市　**津田麦太楼**

旭川の三角洲で鶴見橋へ一里半、岡山えの蔬菜の給源地帯ですから畑の中に家がぽつぽつ。私の家は東南向で陽当りは上々です。植込みの雑木を透して人参、大根、ほうれん草の青物が秋の陽を一杯に吸うております。

家から南西に岡山市街が展け操山のKKのアンテナが見える。遠く児島の山山、四国の山も黛のように望めます。東から北へ目を移せば、上道平野を隔てて備前不二の称ある芥子山、竜の口山、ずっと真北に高倉山この高倉の麓が牟佐で故山雨楼の旧居があります。

家の裏手は半田山脈で池田動物園の白亜の展望台が望まれます。

新聞やのネタ所

大阪市　**不二田一三夫**

雨つづきで久しぶりに陽の目をみた街の顔を『梅雨あけの表情』テナ見出しで新聞の三面に、二年連続でわが長屋が写真に出ました。

オムツとコウモリ傘の二重奏をブン屋さんは絶好の取材基地にしているようです。娘たちもボーイフレンドができる頃になると、この長屋をイヤがるのですが、しかしボクにしてみれば、標語の賞金で買った土地と家なので、たとえ何が見えようが、ここはボクの桃源境なのです。

金泥集

麻生葭乃選

課題「逢曳」

逢曳をはっきり言うて出るケンカ　花代子
逢曳の帯はうれしい音でしめ　同
逢曳は次に逢う日の手をにぎり　同
ランデブー親をだまして来た二人　阿茶
逢曳のようねと時間打合せ　同
看護婦の逢曳門限気にかかり　〃　女
潑剌とサイクリングで逢曳し　同
逢曳が隅のテーブル占めたきり　若芽
逢曳の横でコーヒのまずいこと　同
雨降れば降るでしんみりした逢瀬　冨士子
逢曳に弟連れて行けと云う　風の子
逢曳は五里でも歩きたい気持　きさ子
逢曳は都会に近い温泉を選び　ひさみ
逢曳はうれしい事も云うて呉れ　徳子
逢曳の男は次の駅で乗り　周甫
逢曳の場所が変ってまごつかせ　美舟
逢曳の今日はコースをかえてゆき　俊江
逢曳の手紙はちりの元になり　綾女
逢曳えお巡りさんも気をきかし　花奈女
逢曳の常連女将も心得て　明美
逢曳えパーマ時間がかかりすぎ　カネ女
逢曳の相手が今日は変っていい　陽子
こおろぎも秋逢曳の裾で鳴き　知恵美
逢曳の心に夫も吾子もなく　雅佐女
スピッツに落ち合う場所を知られて　沙智子
逢曳の相手連れ込むうちの猫　玉枝
逢曳が宿の女中の眼に追われ　たつよ
逢曳の二人ライトに背を向ける　桂子
逢曳の雨のいたずら父は内　よし子
逢曳はあなた次第の場所を決め　都詩子
逢曳はあまい湯の香のするホテル　千代美
後先を見廻し逢曳ホームに出　とよ
逢曳へ急ぐパーマにひまが入り　小石
逢うて来た機嫌と妻に怪しまれ　幸永
目くばせをして別々の座席とり　そと枝
いつ結ぶ恋とも知れず今日も会う　史子
逢曳の都合お稽古休んどき　花鶴美
逢曳の誰か待つよなレストラン　白美
待ってるというお電話がかかって来　スミ子
嘘云って出た逢曳のふと悲し　美保
逢曳のロマンスグレーは落ちつかず　奈良子
逢曳へとげある声を聞き流し　美喜
逢曳の足音虫も音をひそめ　貞美
事務多忙さいて逢うてる喫茶店　悦子
商魂が逢曳なんど忘れさせ　小菊
逢曳へ河原は水の無い日也　葭乃

川柳雑誌社
婦人友の会　**新春句会**

日時　昭和33年1月26日（日）午後1時
場所　南海本線諏訪森中島小石宅
司会　丸尾潮花
挨拶　理事長　中島小石
挨拶　会長　麻生葭乃先生
兼題　活け花　麻生葭乃先生
兼題　笑顔　中島小石
兼題　餅　高橋操子
兼題　落第　太田良子
兼題　鈴内藤きさ子
兼題　羽織　山川阿茶
各題三句席題ナシ
〆切　1月15日厳守
投句先　大阪市生野区中川町二ノ三〇　丸尾潮花宛
会費　三百円（懇親宴食事付）
（投句者は友の会々員に限る）

川柳第二教室

「一路集」の選をして

中島生々庵

「一路集」の選を時々仰せつかる関係で、何か感想を書く様にと編集局から連絡があった。適当な御仁が外にも沢山居られようにとも思ったが、とにかく思いのままを書いて見てその責めを塞ぐことにする。

「一路集」の選をして感ずる事は外の選の時も大体に同じであるが特に「一路集」の投句者各位の中にはセンスのするどい、若い年令の方らしいと受取れる方々の熱心な投句が毎回おびただしい数に上る事であって、寔に力強い限りであることである。而も抜ける、抜けぬ、或は全没などは殆ど問題にせず毎課題に勇敢に御投句なさるその精進振りには頭が下がる思いがする。勿論全く初心者と思われる方が多数に見受けられるのであるが、充分完熟して地方の指導的立場を確保されている所謂選者級の御投句も可成り多い。従って佳句として発表される天地人五客等が、それ等の老練組に占められるのも当然と云えば当然であろう。その当然であるべき順位がどうかすると当然でなく逆な場合も亦当然あり得る。最近私は課題「グループ」の選をする際に集った千数百句の中から先ず第一選として三百十三句を無記名で清記し、之れから第二選を百五十二句、第三選を九十八句、決選として発表したのが、五十一句となった。単に数字の上から言えば相当な厳選であろうが、内容から言えば必ずしもそうではなく、選者としての悩みは外にあるのである。

――忌憚なく言わして頂くと――充分力量を持って居られる筈の方が、三考四考と言う推敲が不足して居るのやら、或は全くなされて居ない極端に言えば投げやりか書きなぐりかと言う感じを選者に与える句が相当にあった。その中には締切切迫の臭いがするもの、又はそうでなくとも天馬空をゆく式な筆勢で十七文字を並べたとしか受取れない句も存外に多い。それに引きかえ血のにじむ様な苦悩苦吟の一句、二句と云う投句者もある。私の様に気の小さい選者は電気針にふれる様に喜びを感じたり寂しさを感じたりさせられる次第である。恐らくは「一路集」にたずさわられた他の選者の方の中に私と同じ気持ちの方も多数居られると想像するものであるが、課題吟であろうがあるまいが、その作句態度と云うものが極めて重要な点だと云う事は論を俟たない事柄である。本紙に毎号連載される「川柳第二教室」等で執筆していられる講師の方方の百言千言も詮じつめると作句態度と云う事に結論されると思う。その真剣な熱意とか、精進の苦悩とかが如実に現われて居るのが白柳子氏担当の「質疑に答える」欄にしばしばはっきりと反映して見受けられる姿である。

私は先月友人に誘われて鳥羽の沖釣りに行った。生れて初めての経験であって笹舟の様な漁船で相当沖の波のゆれに胸を寒うして糸を垂れては見たが勿論一向に釣れる気配もない案内の漁師は自分の針にばかり釣れて来る「すずき」や「はまち」を気兼ねそう私に対して大変気の毒がって餌のつけ方はこうだとか、糸の深かさ浅さはどうだとかそれはそれは至れりつくせりの気遣い方をして呉れるが何分にも初心者の悲しさ、三時間近くも同じ姿勢で寒風の中に無言のまま糸を垂れて指のしびれ腰の痛み、ねっから釣れそうにもないのには我れ乍ら我が身がいとしくなって来た。その折柄突如として指先きに伝わる力強い快感。これこそ先刻来幾度となく漁師に教わった通り、言葉等では現わせない魅力のある感じである。思わず上げたうめき声で全身の神経を両手先きに集めて、糸のもつれも構わず、たぐりたぐり、たぐり続けた。糸の先には電波にも似た様な微妙な抵抗が一尺一尺近かづいて来る。「鯛だ、鯛だ、お客さん鯛だよ」夢の中をさまようている私の耳に狂気した様に漁師の叫ぶ声。「ぐんぐんたぐって。一寸ゆるめて。もっとたぐって」漁師も無我夢中である。私の横に辷り込んで来て水際に躍っている獲物を網ですくい上げて呉れた。目の下一尺八寸と云いたいが実は五寸足らずの二年鯛、それが波を離れて私の手許に握られたその瞬間の欣びは――あのピンク色の中にルリの玉に似た斑紋の光り、仏典に出て来る極楽浄土のコハクの燿きとはこんなものだろうかとさえ思われた。今まで萎れ切っていた蒼白な私の顔は恥しさも忘れて紅潮して来る。胸の高鳴りはどうする事も出来ない。隣りに坐っている漁師の喜びが又大変なもので「お客さんこれこそほんとうにお芽出たいと云うものだ。大漁じゃ大漁じゃ」と大はしゃぎの一幕。

この話を帰ってから路郎先生に申上げたところ「その漁師の歓びがよくわかるよ。君の嬉しさもさること乍ら、その漁師の心こそ

御贈答にはそごうの
商品券
300円～10,000円
大阪店・神戸店・東京店 各店共通
そごう

長年初心者を指導して来た者にとっては、たとえ五寸足らずの小鯛にしたところが釣り上げて呉れた作句者を抱きしめてやりたい様な感動は同じ事だ。指導者の欣びは作句者の欣びに寧ろ数倍も場合によっては数十倍もするものだ」と仰せられた。見上げると先生の慈眼には光るものさえたたえられていた。

私は「一路集」こそ選者と投句者との間にこの光る窓を数多く開かるべきだとしみじみ考え込んだのである。

同舟近詠

松山市　前田伍健

岸さんの笑顔気の毒とも見ゆる
六十の色気ネクタイなど替えて

弓削、津山地方へ旅

子を思う句碑なつかしみ秋日中
まんじゅうに路郎の句あり句を語る
夕陽も白鷺も見て旅津山

大阪市　橋本緑雨

アベックとみてビラをばくれぬなり

長野県　高峰柳児

役得は昼酒なども憚からず
アルサロが素顔で居るを買われて居
飲める顔振れで小雨を決行し
判持って来ぬのへ役所素気なし

大阪市　石田沐天

シスターボーイこれはこれはの石頭
よろめいた心女にキャッチされ
仕方なく笑う女に成りいたり
俺れがワシがと侍めくポリス
名人へ物を申せば黙殺し

今治市　長野文庫

暇よりも金のあるのが先ず推され
年と共に働らき蜂になる男
子のことになれば善人変ぼうす

大洲市　米沢暁明

バスガール拍手へ歌を追加する
私なら嫁くわと少し嫉いている
古戦場知るや知らずや月見草
凸凹の道も笑わしバスガール
水鉄砲女の子にもおもしろい

今治市　月原宵明

遺作展秋はいよいよ深まりぬ
孫ほどの税吏にめしもよう喰べず
寝たきりでまだ采配を振っている
料理屋へ行くにも鞄はなさない

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
価　二五〇円
送　三二円
取次所・川柳雑誌社
至文堂
東京都新宿区払方町二七　振替東京二九五〇七

句報拝見

（十一月号）

「にしなり」A列5号・4ページ＝再建西成支部の第一報。摸造紙で百斤位いのアテがあって、綴込み用のアナまで用意する後藤梅志氏らしい凝り方が第一に目につく。幹事の西川晃氏が本屋さんときているので、号を追うごとに立派なものになって行くであろうことを期待している。新人養成を第一目標におくだけに発らつたるものを感じさせる。

「名古屋」A列5号・10ページ＝八月に創刊号を出したばかりだが、長尾越鳥、佐藤千代春、畳田一念諸氏が、相談役吉田水車氏のもと、若さにあふれている。ページの上下に空間をみせ詩誌の感じを出しているのも新鮮である。〝川柳とは何か〟から毎号二句を抜すいして紹介している。

「こまつ」A列5号・16ページ＝二度刷の表紙に活版印刷という豪華誌である。編集発行は伊藤茶仏氏、執筆陣に山上千太郎氏ほか堂々たるものである。表紙の四は広告で埋める手堅さも茶仏氏のお顔であろう。第一巻第十号誌齢は若いが強大な力がみえる。

「あべの」B列6号・8ページ＝菊沢小松園、須崎豆秋両氏を始め、選者級で大半をうずめるという全国一の強力メンバーは正に圧巻。古豪、中堅、新人がしのぎを削る作句熱も、すさまじいものがあり、特に高校生の多いのも珍しい。この大型布陣に対して句報の小型が目立つ。

（F）

麻生葭乃著・米田三男之介装幀
葭乃句集
福壽草
定価二百五十円
送費　三十円
菊半型・函入
本書は川柳の母・麻生葭乃女史の異色ある作品の金字塔です。各方面から御好評をいただいて居ります。
大阪市住吉区万代西五の二五
発行所　川柳雑誌社
振替口座大阪七五〇五〇番　電話住吉（67）六〇八一

全国の名物と川柳行脚（四）

水谷竹荘

長崎の支那料理

支那料理那の字が缺けている硝子　義豊

支那料理又前窓を赤く塗り　珍竹林

喧嘩ではない支那料理こさへてる　三太郎

中国の地理も識らないチヤイナ服　玲人

長崎の支那料理のうちで名物として賞味されるものにしっぽく料理、豚の角煮、ひれ吸いもの、豚と竹の子の味噌からし、鶏肉のいり焼、長崎ちゃんぽん、トマトサージン、皿うどんなどがある。

その中ではしっぽく料理が代表的なものである。「しっぽく」とは卓袱とかく、中国語で卓袱（チョーツー）がなまってシッポクになったという。長崎では客の招待は家庭でするのが上等とされています。日本料理の伝統にない豚肉が材料になり、揚げものがあり、調味料として白砂糖が使われるのも特色の一つとされています。長崎の支那料理は開港当時から唐人がひろめたものだから、当時の交易関係地だったことが料理にもあらわれている。つまりここのは北京料理でなく、華僑の出身地である福建、広東料理がたてまえになっています。これが長崎の支那料理の特色といえましょう。

安心院のすっぽん料理

安心院は別府駅から亀の井バスで安心院下車長崎から引返して今度は日豊本線を別府から宮崎、日向、鹿児島へと旅をつづける事にします。

貧血のスッポンに飽き鯉に飽き　飴ン坊

スッポンはもともと九州地方の河川にすむものだが近頃は料理用として養殖されている。生きたスッポンの頭に包丁を入れ、生血を器にとり頭をきりとる。それから甲をはがしてきりさき調理する。生血をのめば病人の元気恢復に特効がある。吸いものにもする。肉はうまくて煮もの、鍋もの、味噌汁、大根おろしをつけてすき焼にもする。

ここのスッポンは大正二年、桂太郎公が病を得て鎌倉に療養中、木下謙次郎氏が公に送って以来、全国的に名を知られるようになったといいます。

耶馬溪の茶そば

独りそばをすすればシンとする　夜来鳥

二つ目のかけを食ふのに鼻をかみ　はん蝶

そばは山国のものだから、この地方にもとれる。それに霧ふかい耶馬溪は茶の成育にも適している。耶馬溪銘茶として売り出されている、茶そばはこの二つをまぜ合せたもの。そば粉に茶をまぜて手打ちにしたのは、山趣に富んでいます。

臼杵（ウスキ）の黄飯

別々な心で同じ飯を喰ひ　信子

丼で結構といふ客が来る　三津木

米の水一筋白いあとを引き　凡柳

ちゃんと坐って幸福な夜の膳　三太郎

黄飯という名は、めしの色から名づけられたものです。くちなしで色をつけた水を用いてめしを炊く、炊きあがってから、コチの身になす、ねぎ、ごぼう、ずいきなどの味つけしたものを加え、めしとまぜてたべさせる。コチの身の歯ごたえと、かんでしみ出るうまさは何んともいえないうまいものです。

宮崎のけんちゃん汁

から汁は吹くとそこだけチトへこみ　美紅

野菜、野鳥をとりまぜた郷土風の汁もの。ごぼう、にんじん、しいたけ、きくらげをきざみ、それにしぼった豆腐を加える。肉類ははと、きじ、山鳥などをミンチでそぼろにしたもの、それをまぜて薄塩で味をつけ、油いためにしてカツオのだしで汁ものにします。これは宮崎の古い料理で、春秋ともにできる。一杯ですまされず、おかわりがほしくなる宮崎の名物です。

鹿児島の桜島大根

大根が膝でゆれてる故郷のバス　箔川

詩吟では鹿児島弁と思われず　東岸子

桜島大根は西桜島村の特産だ。早、中、晩の三種があるが晩成が一番大きく丈一、二尺、重さ四貫、味のいいことは無類。用途は糠味噌、塩漬、味噌漬、干し大根などにもする。大根のおろしあえは、カキ、ナマコ、ホシエビ、チリメンジャコなどよくあう。その外に大根なます、風呂ふき大根、色色の鍋料理にもいれるし、鹿児島を訪れた人は、おみやげに重たいのをしんぼうして買って帰ります。

これで九州を一周したので、次は東京方面へ行脚の旅をつづけたいと思っています。

一路集

末っ子

西尾栞選

末っ子だねと育ち見抜かれる　堅持
末っ子と解りふんと納得し　九呂平
末っ子の哀しさ母の白髪ぬき　葉光
末っ子の嫁と一番うまが合い　水堂
末っ子へ望みをかけている白髪　進之助
電報も不要末っ子が生れ　凡茶
末っ子に父の機嫌を見にやらせ　一進
末っ子のお守りはいつもポチとミー　留三
末っ子に引き廻された日曜日　宗太郎
末っ子はドライミルクで太らされ　味平
末っ子といさかいをする分の悪さ　淀月
末っ子が兄の養子として育ち　恒雄
末っ子へあるだけ見せる母性愛　千里
末っ子の姉母さんに間違われ　狂二
末っ子はだましすかして着せられる　芳仙
末っ子の丈兄を抜き父を抜き　ざんたく
ジャンケンはやっても末っ子先にとり　光郎
お土産へ末っ子一人駄々をこね　甦光
末っ子の貯金箱へは父も入れ　一鶴
末っ子の養子にたよる不倖　井蛙
末っ子へ叱るひとみが笑っていまどか　高史
末っ子の学資で姉は嫁きおくれ　恵二朗
サイクリングもう末っ子にかないまへん　幽谷
控除欄から末っ子も失格し　雄々
末っ子も女六人目が生れ　藤波
据膳で食べて末っ子まだ不足　むじな
末っ子はしなびた乳で育てられ　漣
末っ子の抗議に負けた犬の処置　一休
末っ子の意地そのままに育てられ　九里三
末っ子へ二男三男の風あたり　薫風子
末っ子を寝させて氷水を飲み　七面山
甘えるだけ甘えて末っ子やせており　鬼美
末っ子は特売品で育て上げ　すみ江
末っ子もしとやかになる十八九　春雄
末っ子の羊羹少し大きすぎ　不二
末っ子の部屋からもれるクセクセ　丹謡
寺詣り末っ子だけがお供をし　珠絵
来客の土産末っ子先にとり　三林坊
末っ子は両手に菓子をもっており　雄声
末っ子に猫が一番よくなつき　八九寸
おっぱいにすがり末っ子口達者　周甫
末っ子の背丈へ生きる慾をもち　巖
(佳)末っ子の舌短いままで成長し　夢路
(佳)晩酌の一口末っ子呑みたがり　春吉
(佳)末っ子は畑の違う椅子につき　芙路
(佳)末っ子はアクセサリーで連れ出され　南牛子
(佳)妻末っ子里より母はよく通い　淀月
(佳)末っ子の躾親類腹がたち　鶏汀
(佳)臍繰りは皆末っ子の名で預け　静馬
(佳)末っ子について母親嫁きたがり　蓑流
(佳)赤い羽根やはり末っ子につけてやり　牧人
(佳)末っ子の苦労知らずな手の白さ　俊見
(人)御近所の愛まで末っ子かき集め　舟遊
(地)末っ子の気ままは左派にかぶれだし　十九平
(天)末っ子が天衣無縫に育てられ　味平

サンプル

伊藤茶仏選

サンプルはどうあろうともやめにする　巖
サンプルは上底ですと書いてなし　秀三
お似合というサンプルの派手過ぎる　蓑流
サンプルの様には出来ぬふくらし粉　凡茶
サンプルのクリーム遠慮なく使い　ゆたか
参加賞とかサンプルをぬけめなし　俊見
司会者がサンプル先にちってみせ　雄峯
鏡台はサンプルだけで間に合わせ　陽子
サンプルとおんなじ柄で値が解り　実男
サンプルと値引きをいっておいてゆき　庸佑
サンプルは胴切りしたも並べとき　万古人
こんなものなのかとサンプルなめただけ　吟平
新家庭のサンプル花も活けてあり　好子
私がいいサンプルよと口の先　銀子
サンプルが之じゃと首をかしげられ　高史
サンプルを前に外相つめよられ　ざんたく
よく出来たのはサンプルへ取っておき　水堂
値の安い順にサンプルみせゆき　甦光
サンプルの味をけなしている買手　ひろむ
家中の名で取り寄せる試食品　祥月
サンプルを値切って買った子沢山　淀月
サンプルで癒った肩のこりを賞め　一ン十
もりのよいのをサンプルに出しておき　味平
サンプルへ延べの手形を書かされる　恵二朗
サンプルへ母娘のセンスくいちがい　宗太郎
サンプルは素敵な色に刷れ上り　幽谷
店先のサンプルだけが減っていき　光郎
サンプルを買った義理が買ってくる　正柳子
サンプルの送料送れに引っ掛り　井蛙
決め兼ねている染め替えの色見本　春吉
京見本覗く妻の目まだ老いず　一進
見本より濃いを染物屋は言わず　初甫
サンプルが変色している小引き出し　雄声
サンプルも色あせたまま左り前　芙路
サンプルを褒めてサクラが派手に買い　恒雄
サンプルと知らず患者は礼を言い　七面山
新薬だからとサンプルで高う取り　珍ちく
サンプルの注射と言わず打っておき　藤波
テーブルスピーチ私夫婦をサンプルに　蜻蛉
サンプルの菓子をつまんで茶ももらい　鶏汀
丹念にサンプルを見てかけ一つ　一鶴
サンプルを覗いて矢張りテキにする　堅持
見本より値切っただけは品が落ち　雄声
採算がとれず現品少し落ち　牧人
サンプルは効能見える程呉れず　不二
好子(佳)人形に着せた衣裳は予約済み　むじな
(佳)食堂の見本へ迷う子供連れ　代仕男
(佳)見本帳流行りの色がまた変り　圭井堂
(佳)キャンセルへセーブサンプル見当らず　静馬
(佳)寸法は取って見本にまだ迷い　藤波
(佳)サンプルをひろげ仕立の値にもふれ　雄々
(佳)世話役は先ずサンプルの折で飲み
(人)呉れるものはみんな貰ろと見本市
(地)京染の見本に長屋中が寄り
(天)サンプルの効能ためす風邪を引き
(軸)見本帳借りて細ぼそ母稼ぎ

花地物語

いのちある句を創れ

投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正確▼締切毎月二〇日▼投稿先本社宛

本社 文化の夕（大阪市）

11月7日　午後6時　於 光明寺

文化の夕に集う人々のなかに、古豪岩本素人氏の珍しいお顔も見え、ニュー・フェース十数名が参加され、和やかな気みなぎる光明寺の日本間。

中島生々庵医博が、路郎先生の病床経過を発表されることになり、一堂シーンとして息をのむ。十月六日に病床に伏され、一時は絶対安静とあったが、昨今は常時の健康体とほとんど変らぬまでに御全快になられたと結ばれ、みなホッとした顔がほころぶ（病状経過別項参照）。

戸田古方氏の句評は、文化の日と前後して世界をにぎわせた人工衛星をとりあげ、科学で人間を幸福にせよと叫ばれ、十一月号の俊江氏の（欲の道）から、一三夫氏の（原爆の）へ移りアンバランスの面白さから、光一氏の（案山子）へ伸び、知恵美氏の（朝顔の）の杖に言葉の芸術があるとされ、十悟氏の（アベックに）と、夜潮氏の（診察に）から前者の墓碑、後者の直しくれの言葉の使い方を賞めて壇を降りられた。

披講も快調に進み、文化の夕の不朽洞賞杯は中島生々庵氏の佳句に輝き九時閉会。（若本多久志氏御寄贈の句箋が本月からお目見得しました）　（F）

出席者＝圭井堂・一三夫・一ン十・永断・摩天郎・天真・淀月・素人・宇人・義弘・堰子・紫香・いさむ・知恵・梅志・旅風・以兆・高史・静馬・武助・省三・牧人・東雲・奈良子・嘉子・よし・与呂志・潮花・一飄・利武・杏花・悟朗・旭・進之助・梅里・生々庵・恒明・三司・孤舟・いわを・楽天・季賛・柳宏子・友信・鬼美・土佐太郎・繁雄・白柳子・十悟・文秋・多久志・古方・花車・博也・淡舟・庸佑・鵜汀・留三・舟遊・薫風子・月都・すゝむ・雄声・妄夢・三休・句念坊・宏子・葭乃

兼題「てこぼこ」　麻生葭乃選

ハイヤーもてこぼこ道は縦にゆれ　季賛
どさ廻りてこぼこ道を歩かされ　紫香
てこぼこの景気ぼこには縁がなく　すゝむ
てこぼこをさけたら遠い廻り道　知恵美
てこぼこの道観光の名を汚し　梅里
てこぼこのへこんだところへ灰を捨て　三休
てこぼこを愛でて利休の流れくむ　多久志
十株でもてこぼこ波が気にかかり　留三
てこぼこも楽しアベック揺れてゆき　繁雄
てこぼこで痛んだらしいお越入れ　博也
食台のくぼみ嫌いなコップ酒　武助
ここからはバスがゆれます道になり　文秋
てこぼこは仕方がないという政治　楽天
御視察へてこぼこ道を先ずなおし　いさむ
てこぼこな売上げしめて儲けていサイクリングでこぼこ道は押して抜け　淀月
みかんとれそうでこぼこ道へバス　紫香
てこぼこで観光バスは注ぎこぼし　鵜汀
てこぼこのはげしい過去の立志伝　梅里
てこぼこの道へ上ではもずが鳴き　梅志
てこぼこの道サイクルの列乱し　旅風
てこぼこの道へ来てからバスに酔い　陽子
てこぼこの畳家賃が滞り　素人
直したら又堀っている市の予算　永断
シガレットケースのへこんだ遺品蓄く　武助
でこぼこを乗り切る腕で儲けていすゝむ
でこぼこの道で彼女にお手をかし　高史
ゆれますと車掌一緒にゆれて見せ　与呂志
でこぼこの途のはずれの火葬場　月都
でこぼこの道を車掌に謝らせ　旅風
でこぼこがとれて善人らしく老け　生々庵

兼題「教祖」　清水白柳子選

散髪屋だけが教祖の顔を撫で　幽谷
説法を了えた教祖の菊いじり　薫風子
世界統一教祖もでかい夢を持ち　一飄
人間味あって教祖は親しまれ　留三
お茶漬けはこっそり喰べている教祖　紫香
国鉄のダイヤが狂う教祖祭　梅里
風采の上らぬ教祖有難し　いわを
教祖また信者の仲人頼まれる　いさむ
大道具小道具教祖取りかこみ　圭井堂
教祖でも税務署だけは苦手らし　満秋
気狂いと言われたこともある教祖　牧人
御教祖のよろめき派手に噂され　土佐太郎
悪筆は教祖自慢のお墨つき　三司
無学なをまる出し教祖のお筆さき　一ン十
逢引きの場所に教祖も利用され　花車
商魂を胸にひそめている教祖　利武
儲かった事も教祖へお告げする　以兆
大量生産教祖一字を書きなぐり　一ン十
教祖様教えは皆で作り替え　喜仙
寿命にはやはり教祖も逆えず　よし
医者がさじ投げて教祖へ頼りきり　義弘
春宵一刻教祖になった事を悔い　孤舟
方言で叱る教祖が有難し　以兆
トイレーもままには立てぬ教祖さま　恒明
悩み聞く教祖の顔が脂ぎり　牧人
教祖様人の恋までのぞき込み　知恵美
教祖にもヒューマニズムはよくわかり　博也
三代になれば教祖は大学出　一ン十
手遅れにさせた教祖を諦めず　舟遊
風引けば教祖とんぶく出してのみ　すゝむ
じょら組んで教祖自分の足になり　妄夢
三度目の教祖にすがる不倖　省三
絵姿に後光は画かぬ教祖にて　白柳子

兼題「瘦我慢」　丸尾潮花選

瘦我慢の禁酒よく似たものを飲み　季賛
瘦我慢やっぱり首が惜しうなり　礼司
やせ我慢別居そろそろパンにあき　阿茶
瘦我慢張って目出度い荷を造り　孤舟
あんな男きらいですわと泣いている　素人
瘦我慢亡き父さんをえらく言い　旭
後妻など嫌です豪の立った処女　多久志
やせがまん自慢ばかりの主婦の会　句念坊
瘦我慢張って実家を遠く住み　以兆
瘦我慢血のでるような金がいり　幽谷
瘦我慢折れるチャンスは心得る　梅里
やせ我慢とうとう英語辞書を引き　梅志
瘦我慢もう不渡を処理し得ず　博也
冷戦を続ける妻の瘦我慢　周甫
瘦我慢古いゆれんへ見栄をはり　留三
瘦我慢ひとりになると泣きはじめ　紫香
瘦我慢派手な暮しをまだ続け　鵜汀
瘦我慢うすうす知っていた間屋　淀月
プライドが何時も邪魔する瘦我慢　文秋
やせ我慢伊達の薄着で冬をこし　阿茶
一徹な学者配給だけで食べ　陽子
瘦我慢背中合せのまま寝る　杏花
しまいにはむかついて来た瘦我慢　月都
瘦我慢時たま財布押えてみ　花車
返す当てないのに啖呵切って来る　文秋
瘦我慢玄関までは持ち応え　永断
瘦我慢はずんだ寄付が惜しくなり　雄声
落ちぶれてこんな気楽さいと言い　文秋
初会から惚れたと言わぬ化粧する　潮花

兼題「疊替」　八木摩天郎選

本宅が畳を替えた事も知り　圭井堂
畳替すれば病人気を廻し　幽谷

カメセマ
亀山ローソク

間貸した部屋を残して畳替え　武助
畳替してまで貰うたのに去なれ　永断
畳替え出来て畳屋ねぎられる　庸佑
畳替したを税務署見て帰り　一鶴
畳替え煙草に気い付けやと言われ　よし
転業の赤線ここも畳替え　扇子仙
病人の部屋を残した畳替　杏花
畳替妻も一緒に替えちまい　花車
畳替して退院の妻を待ち　楽天
畳替古女房も来て座り　淡舟
畳屋を感心させた古畳　杏花
畳替死期が近いとみたか急き　永断
畳替父の法事に間にあわせ　阿茶
四・五帖を裏替だけの畳替　月都
お祝いの品も並んだ畳替え　博也
来年へまたまた延ばす畳替　旅風
畳替えその夜高砂やが聞え　薫風子
畳替女房の皺がよく目立ち　高史
畳替お客せぬ間に火をこぼし　阿茶
退院も近く嬉しい畳替え　圭井堂
畳替役得してるよに言われ　恒明
畳替えなんぼかかったかと聞かれ　鬼美
畳替当座は外で遊ばされ　高史
畳替え後妻すすめる叔母がいて　与呂志
妾宅の畳はすぐに替えてやり　高史
歳末の道邪魔になる畳替え　梅志
路地口で畳替えする二号邸　一ン十
去年から妻が貯めてた畳替　季賛
永病んで一帖だけの畳替　楽天
替えたての畳へ旅をくつろがせ　旭
畳替近所は別な眼でながめ　永断
新妻を座らすための畳替　摩天郎

席題「街角」　黒川紫香選

待ち人は来ず街角に落葉散る　牧人
街角へ来て三度目の別れする　三司
街角へ来て引き返すパトロール　省三
ポン引へ街角の風秋の風　一飄
街角で見上げるネオンのまぶしすぎ　孤舟
街角でおもちゃをせがむ子を叱り　摩天郎
街角へ来てから浮気の虫が起き　杏花
街角に来てチンドン屋派手にやり　義弘
街角へ来たら夜泣きは笛をふき　留三
街角に来て御みこしの肩を代え　雄声
街角に質の看板行きとどき　淀月
街角のビラのスターは汚れて居　よし
サンドマン歩きつかれた街の角　利武
街角の別れへ男ふりむかず　杏花
街角も煙草屋だけの灯となれり　薫風子
街角を曲るに惜しい月の冴え　三休
街角の三角なりに家が立ち　一飄
街角をまがるとこまで見送られ　庸佑
電線が鳴り街角は冬に入る　薫風子
靴音が夜の街角でふと止まり　いさむ
街角でどちらも酔うて居る握手　杏花
また元の街角へ来た訪ね人　一三夫
街角であきらめて来る落し物　紫香

席題「二階借」　福田妄夢選

二階借り屋根の茶滓を見つけられ　杏花
二階借金が切れたか宵から寝　利武
夕焼けがきれいに見える二階借　鶏汀
夫婦喧嘩で足止められた二階借　三休
二階借り手間のかからぬおかずにし　一飄
二階借り映画中途にして帰えり　博也
表札の大きい方が二階借　圭井堂
二階借り犬も喰わない仲へ降り　多久志
アイロンを気兼ねに使う二階借　恒明
二階借下の簞笥へ腕を貸し　梅里
戦災のかなしみのまま二階借り　与呂志
二階借り下のやもめを無気味がり　一飄
二階借りほんとはミシンほしいなり　博也
二階借りしても盆栽止められず　鶏汀
二階借下よりずっと良いくらし　句念坊
縄ばしごほしいと思う二階借　楽天
二階借通天閣をまともに見　淡舟
二階借あがったとこでせのびをし　義弘
二階借り下から指でさされて居　紫香
共稼ぎ何時まで続く二階借り　季賛
二階借下の匂いで飯にする　すゝむ
二階借下から火種また貰い　いさむ
全集を二階借りから借りて読み　淀月
二階借の知恵でのがれた差押え　堰子
すき焼の音が気兼ねな二階借　堰子
空箱に葱が芽を出す二階借　淀月
はい出したこどもに困る二階借　静馬
月末になれば帰らぬ二階借　一三夫
二階借聞こえるがなと袖を引き　素人
二階借ラジオを聞けぬ日が続き　杏花
押売りへたよりにされる二階借　一ン十
下の子の土産も二階借りは要り　恒明
二階借りの方が新聞先に読み　妄夢

席題「ええし」　新川博也選

そうれんぎようさん楷の立っええし　杏花
家潰す素質備えたええしの子　旅風
宿題をええしの子供だけ忘れ　圭井堂
隣り組中からええし当てにされ　梅志
しみったれたことゆうてもええし　古方
これしきのことにええしの愚痴を聞き　薫風子
脱税はええしの方がうまくやり　一飄
ええしから見ればおかしい端数株　鶏汀
お祭のええしの寄付が少なすぎ　奈良子
菜葉ばかり喰べてええしのごりようさん　素人
町内の世話はえ忘れで利く羽振り　いさむ
二た言目にええしやからとたかられる　梅里
ええしから嫁を貰うてしんどがり　いわを
幼稚園ええしは何時も泣かされる　よし
ええしから横槍の出るPTA　薫風子
ええしの子のどのシップがまだとれず　杏花
肉屋からええしは犬へ届けさせ　牧人
気疲れがしますええしの応接間　武助
おみこしはええしの前で腰をすえ　以兆
そろそろとええし無芸を気にしだし　静馬
ええし又株の値上り自慢にし　淡舟
また違うカメラを提げているええし　紫香
ええしの子おだてに軽く乗ってくる　旅風
ええしの子泣かせてみんな散って行き　杏花
ええしの子今度は舞をやりはじめ　紫香
何があるのかええしの門が開いとり　月都
子の知恵でええしの坊に負けてくる　牧人
夕焼けをええしの屋根が邪魔をする　妄夢
出す段になるとええしをかつぎ上げ　梅里
ええしにもプランがあった年の暮　季賛
表面はええしで寄付を断われず　淡舟
ええし皆私立へばかり入学し　よしえ
ええしの子ひいきのような眼で見られ　文秋
植木屋が腹で笑っているええし　博也

（庸佑清記）

川雑　ハワイ支部句会（ハワイ）

失業が笑顔忘れた人にする　虹橋
外交の笑顔家庭へ持ち越せず　砂丘
乳呑児の笑顔へ母という自覚　暁舟
鋒尖を笑顔でうける腹も出来　いつ生
完全に僕を虜にした笑顔　斧平
ミスユニバース天下を風靡した笑顔　泉水
言い渋る頼み笑顔で聞いてくれ　笑流
どん底を妻の笑顔に励まされ　北海
印象に残って消えぬ片靨　エス子
世渡りに馴れて如才のない笑顔　陽炎
老妻の願笑い顔で聞いてやり　廣花麗

雑川 にしなり支部句会（大阪市）

後藤梅志選

附合に笑う顔をば　別に持ち　草一郎
二号にでもなりたい下女は笑顔見せ　周防
笑顔戦術又も新柄買わされる　拝山
複雑な表情笑顔を押しかくし　快夢起
倖は達者に伸びる子の笑顔　柳葉
YESとNOの笑顔で世界廻って来　旋風
無一物巨万の富も笑顔から　弦月

雑川 淀川支部句会（大阪市）

武部香林選

先祖から金は残さぬ家風なり　花村
御先祖の家訓が邪魔な民主主義　水堂
汐時は襖の蔭の咳払い　若菜
汐時をのがして盃また注がれ　さぎす
汐時をみて恐妻家腰を上げ　陽子
汐時も書いて鳴門は秋を呼び　多久志
床柱汐時計って席を立ち　十七
表札へさすが肩書だけは抜き　千里
表札の板蒲鉾の匂いがし　幽谷
当分は名刺を貼って済しとき　東洋男
表札をそのままにして一周忌　香林

雑川 阿倍野支部句会（大阪市）

菊沢小松園選

かんの虫押さえて平で二十年　突破
冷や酒が顔に出る頃妻帰り　楚行
授業料バイトの汗の札も入り　晃
アルバイトですと押売念をおし　雲洲
冷や酒で祝うとこまでこぎつける　逸人
胸騒ぎ今死なれては困る母　牛歩
土を踏む歓喜マドロスだけが知り　文秋
虫の声もう何里ほど来ただろう　梅志
書留へさがし廻って印を押し　屠佑
冷や酒の勢かりたストになり　旭
書留が未だ来ず下宿に小さく居る　樹峯
書留を開ける手許をのぞかれる　唯義
青雲に遠くアルサロの灯を泳ぐ　六龍子
冷ならばなお結構と祭客　不朽庵
冷酒のそれから御興威勢よく　川柳堂
マドロスもラインでいじめられ　勇
書留でまた散財の尻をふき　笑司
送金の書留母の訓辞あり　東天
アルバイトちょっと哀れな声を出し　一三夫
こおろぎの重傷は脚が一つない　豆秋
また一つ星が流れた胸騒ぎ　恒明
シケの夜元マドロスの過去を聞く　十悟
アルバイトこんな心算でないサロン　堰子
書留を押し頂けば延手形　好郎
胸騒ぎ昨夜の夢を占てもらい　小松園

雑川 京都支部句会（京都市）

田中鳥雀報

ラテン語の金の背文字〈季節の灯　あきら
ウインドの季節を電車から見とく　豊次
硝子の向うを季節流れてシーツの白に　礫
ねじれた水道栓夕映え枯葉の挽歌　枯粒
かさこそと枯葉が僕を迎えに出　案生子
池なにもいない枯葉を底にして　司郎
青の躍動眠りにつく枯葉である　たか子
殿様の重態金ふすま銀ふすま　紫蘭
重態の床へ受賞の報が来る　秋月
重態の耳がそこらを知っている　甫三
医師の目に重態さとり灯を弱め　つる子
捉えるものがない帽子を空にむける　白史
捉える瞳捉えて欲しい瞳と出合い　幸男
手首捉えられてまだ眼は逃げている　入仙
スリの眼が捉える距離にいる女　尚平
安ものは仲間が多い熱帯魚　鳥雀
なぐさめる言葉も知らず皆んな泣き　親生
赤い靴下の仲間が一人いる　晴芽
父だけが仲間へ入れて貰らえと言う　亀一

雑川 備前支部句会（岡山県）

浜田久米雄報

すすき一本入れて写真を秋にする　葵丘
月見にもすすきの姿ほめて飲み　竜泉
床柱つとうて雨が漏り始め　幽谷
見送りへ邪魔になる汽車すれ違い　幸仙
挨拶をしても気付かぬすれ違い　永流
すれ違うとたん小犬に吠えつかれ　伊久野
すれ違うバス雨の日を徐行する　万女
落し物恐縮させたすれ違い　娯句楽
嫁きおくれこけし集めるのにもあき　操
新夫婦こけしのように並べられ　あやめ
思い出がひとつひとつにあるこけし　東岸子
叱られているのにしびれ切れかかり　久米雄
明月は見えず団子を食うて寝る　正州
中元にバットが三個来たくらし　清春
日焼した肩に大きなサロンパス　一声

雑川 出雲支部句会（出雲市）

尼絲之助報

不景気も戦争も越えて来て停年　雲平
悔のない姿で膝に孫を抱き　美好
青空をうつして鏡の池とやら　絲之助
雨男がいて気にかかる旅の空　泰之
一人身へ空の青さが頼りなし　白菊
空を気に子はもう夢の運動会　独仙

雑川 倉敷支部句会（倉敷市）

椙原一善選

秋晴れへ会社さぼろかなと思い　谷水
待っとれば逢えたのにまた行き違い　万古
赤字とは見えぬ豪華な宣伝車　春日
行き違い下役だから叱られる　麗水
大掃除ボーイフレンド一人呼び　銀子
もう女房気取り掃除しに来られ　承平
行き違いさせて映画の気をもませ　笑雷
コスモスが咲く秋晴の田舎駅　素身郎
大掃除妻のへそくり見つけたり　平平
大穴が転げて居ます宣伝車　狂風
宣伝車何にか貰えば用がなし　飴ン坊
宣伝車買わねば損のように言い　真奇
秋晴れのプラン妻子にまかしとき　隆文
内職の妻をいたわる箒持ち　鳳月
お掃除と言う特権を女もち　道友
これだけの判がならんで行き違い　葵丘

掃除夫と言わす市庁のバッジで来　幽谷
宣伝車ミス〇〇をちょっと借り　陽子
宣伝車寝かけを起したまんまゆき　一春
宣伝車まずふうせんで子供寄せ　孝水
検査証大掃除より先に届けられ　忠平
宣伝車何を呉れるか首を出し　笠井
川一筋秋晴れの空流し行く　淳奄
秋晴れにトンボの影が薄う飛び　仙二

雑川　**弓削支部句会**　（岡山県）

直原七面山選

あれは夢これは理想で嫁き遅れ　美舟
どん底で明日を夢見る子を育て　美沙
百円のくじで長者の夢を持ち　陽子
ここからは一人で越える森の径　賤女
詩人孤独森の小径が好きになり　流風
夕陽さす森の小径に捨てし恋　美沙
カモメにも別れ惜んでいた出船　笑雷
テープ持つ手に脈動が伝って来　周甫
義理で持つテープも中にある波止場　竜児
出船待つテープにしばし血が通い　笑雷
きっぱりと情切る気の舟に乗り　喜久枝
強がりを出船のドラにくじかれる　政人
夕ざれば月見草にも星が降り　知恵美
囁きを聞いて宵待草が咲き　千年
宵待草のように夜咲く女にて　七面山
若き日の妻の日記を見た留守居　たつよ
年頃の日記に恋が見当らす　承平

雑川　**米子支部句会**　（米子市）

小西雄々報

失恋をしてから女らしくなり　しげる
両方の親御が安堵した失恋　一机
木蓮が咲いて失恋思い出し　美喜江
失恋をしたから故郷に戻って来　蛙眠子
失恋の話も人の事に聞き　節枝
見返してやろ失恋は郷をさし　素飄
失恋の身悶え落葉ふみにじり　すみ子
結局は失恋して良かった恋　春秋
失恋をしてラブレター灰にされ　奎

失恋に秋の淋しさ身に泌みる　幸子
失恋の敵意忘れたお人好し　新雪
失恋が婦人部長の過去にあり　天邪鬼
転任と共に恋人去って行き　芋人
失恋で死んだは遺書をみてわかり　詩郎
闇の眼を通る荷物は軽くもち　庄太
厄年が大過もなしに軽くすみ　一七
失恋の相手と敬老会で逢い　雄々
失恋をした娘が不幸な日を送り　美笑

雑川　**下関支部句会**　（下関市）

石川侃流洞報

恋人の感にさわった軽はずみ　司楼
軽はずみすべった口を手でおさえ　蘇人
脱衣箱の鍵をうっかり入れて閉め　吐泉
軽はずみ叱って見ても始まらず　千里
気易さに押したハンコが責め立てる　嘉次
スタートをやり直しされて立ち後れ　四郎
先輩のお説を入れてやり直し　九呂平
振出しへ戻り屋台の梶を引き　藤四郎
誇張した苦情と税務署知っており　茂美
警察へ来てまで苦情云える酔い　晃
国鉄の案外かるい苦情箱　慈雨
お互に苦情を秘めて同居する　ほなみ
仲秋の名月惜しくも雲に入り　一規
積雲層蹴って爆音だけ残し　伊三男
放心へぐんぐんひろがる秋の雲　千里
ムシャクシャと出れば秋雲美くしい　詩酔痴
寝ころべば秋雲処女に似て流れ　侃流洞

雑川　**宇部支部句会**　（宇部市）

津秋六花選

広告の中へ商魂のありっだけ　雨村
味方に欲しい欲しい顔が敵に居り　豊年
もの言いが意外味方の方から出　六花
真実を聞く法廷の貫い泣き　義平
後楯付いてめっぽう強くなり　佐吉
真実を見せろと男無理を云い　青水
子が二人味方で強い事が言え　マサ子
味方から苦情が出たでほっとする　半休

ユニホーム敵も味方も泣いて居り　実男
父親の意外だまってにらむだけ　靖博
女史と云う奥様へ女中親しめず　哲二
祝杯を上げて明日から職があり　天作
出世した友から椅子をすすめられ　雪峰

雑川　**大聖寺支部句会**　（石川県）

野村味平選

養老院よりは後妻に嫁くときめ　とよ
後妻もうぐっと根を張る地位になり　久雄
家元の二代目先代ほどでなし　恒雄
家元の焼香がながい弟子の数　光郎
当主の急死に家元もめ続け　酔羊
貧相な力瘤ねと妻笑い　金仏
ふるさとの寄進へ郷友力瘤　味平

雑川　**小松支部句会**　（小松市）

伊藤茶仏報

引越の佗しさ子等と落葉たく　すみ絵
町すでに落葉となって未だ嫁げず　千里
隣りから落葉踏みふみ柿を置き　一進
近所へは詫びながら持つ銀杏の実　健吉
見合して亡夫にすまぬ仏の座　柳三
そろそろという年見合日がさまり　千太郎
顔立てるつもりが好きになっちまい　宗太郎
近頃の見合男の方が照れ　やすえ
太陽がすでに傾く曲り角　茶仏
理性いまよろめく五十の曲り角　正柳子
曲り角まで見送らせ月をほめ　松水
曲り角明日の事を念に押し　城南

雑川　**篠山支部句会**　（兵庫県）

小西無鬼報

始発車の音大阪を揺り起こし　一雨
何時の間に起きたか飯の出来た音　豊
年老いた足音のして父帰る　初穂
逃げ足が早いと煮豆しいられる　雅佐女
ここからと逃げ足になる最合傘　よし子
丁寧な寝言むくりと起きて言い　無鬼
療友をみんな起こした大寝言　越山

どんな夢見てはったんと寝言許さない　みのる

雑川　**明和病院支部句会**　（西宮市）

西尾青一路報

しょうむない思案に腕を組んだだけ　舟遊
ゴルフの腕賞めて商談まとめ上げ　珠絵
腕だけはたよりになるが口軽し　川太郎
腕組んで歩いただけのスキャンダル　善坊
片腕が器用な処も見せて居り　明峯
日雇に落ちても腕へ夢を持ち　夢路
洋裁は亭主泣かせの着道楽　青童
洋裁の今日も銀ブラしてかえり　弘子
遅れじとやれHラインAライン　すみ江
洋裁が出来てもミシンない暮し　国男
洋裁で端切れ立派な服となり　ひかる
洋裁は苦手でジャズはよく覚え　すゝむ
洋裁が出来て女の強く生き　知司
洋裁の腕が三十娘にしてしまい　文女
洋裁店へまっすぐ入った八頭身　九里三
洋裁の無邪気を夫婦して案じ　鬼美
病む身にも流行ライン見逃さず　紫路
洋裁を苦労しらずの手で習い　弦月
昼寝する児へものさしで蠅を追い　留三
扇風機昼寝の顔へ首をふり　健二
無理矢理に林間学校昼寝させ　よし
糸屑をつけて昼寝の顔で会い　湖鳥

鮨と料理と酒
アベノ橋地下映画食通街
㊐〇一四七
千日前大劇裏
梅里の店
大萬
★大万川柳（第八十二回）を募る
兼題「花輪」路郎先生選
締切・十二月十五日（旬数五句以内）
発表・十二月廿一日（店内掲示）
投句は　阿倍野区松崎町三丁目
一〇　大万川柳会宛

・編・集・録・音

いよいよ一九五七年のフィナーレです。新年号の「寺内園長を囲んで鳥を語る」から好調のスタートを切って、執筆者諸氏のご支援のもとに夏バテも知らず、快調のペースで号を追えたことは、何よりも有難いことでした。七月号の快挙「古稀特集」は川柳史の一ページを飾るにふさわしいものであったし、後半において田中辰二氏の「川柳文学の再検討」という大文章を頂いて、より重みを加えたことも本年の特色だったと思います。

ただ、路郎先生のご病気で「新川柳鑑賞」を今月もお贈りできなかったことは残念ですが、〝快ったら倍書く〟と、筆談をされた時は、私のようなガムシャラ者が、一滴、二滴、涙を畳の上へ落したものでした。この責任感に、私は胸を打たれたのです。

今こそ申上げますが、十一月の扉へ「短詩街プロミナード」を執筆された当時は、いく分快くなられたとはいえ、まだまだご静養を願わねばならない証拠に、原稿をそのまま印刷所へ回わせないほど判読しにくいものでしたので私が清記したほどでした。こんな時にでも、先生は、新聞柳壇ほかご自身が責任をもっておられる選句や原稿はキチンと〆切日までに送っておられました。

本号には川柳塔の没句から、ご執筆を願ったのですが、これはクリスマス・プレゼントです。新春のお年玉には「新川柳鑑賞」や、先生の「川柳家の二十四時」等、予定しております。ご期待願います。

さて、先生のご病気はと、ご心配の方々には、中島生々庵医博が専門家の立場から、次のようにご執筆くださいました。

柳人交歓年賀広告を募る

新春号へ貴方の年賀広告を

★一口金二百円。幾口でも申込んで下さい。一口分の原稿は住所と姓と雅号程度。活字指定はおまかせ願います一口分は五分の一段組三行。

★原稿締切は十二月五日着便

★広告料は前金のこと（郵券代用でもよろしい）

川柳雑誌社

○

▼笑いのとまらぬ良い年をお迎えください。

（一三夫）

先生のご病気に就いて

中島生々庵

突然路郎先生が発病されて社の内外を問わず大きなショックを受けた。急病であったのと、御病状が絶対安静を要求されたので一般の方の御面会を厳重に遠慮して頂き、そのために皆様の御不安も倍加したかと恐縮しているが、九分九厘御全快の域に達した現状に至るまでの御経過の大略を記録的に御報告申上げたいと思う。

十月六日関西短詩文学連盟が大阪市教育委員会と共催の市文化祭第一日である短歌部大会に、連盟理事長として御出席されて御帰宅の夜中突然言語の自由を殆ど奪われてしまった。直ちに主治医により応急の手当が加えられ、後刻馳せつけた北川春巣博士と不肖等が協力して御病状の悪化防止に努めた。当時熱発もなく脈搏も正常嘔気等の憂うべき発作もなく、殊に御意識が完全に明瞭であった事は周囲の人達に明るい予感を抱かしめるに充分であった。

翌七日の午後から御家族と筆談によって空腹を訴えられ寧ろ異常に近い程の食欲を示されて安眠される。

八日朝からは不自由乍らも漸次言語を取り戻されて殆ど筆談を要せない迄に至る。

十二日斯界の権威内藤正章博士の御来診を煩わし専門的の診療に入る。発語の遅滞はあるが粥病以来の経過を親しく内藤博士に元気よくお話される。

内藤博士御診察による内容の概略を申上げると、十六日の血圧百七十四、二十八日百三十六、十一月六日百四十。血液検査もあらゆる角度から施行されたが僅かに白血球が一時的に増加していたほか、ワッセルマン氏反応等も凡て陰性であった。

以上の事から内藤博士は結論的に次のように発表された。

1. 血圧の数字等から見れば四十歳前後の若さに概当する肉躰である。
2. 診断病名は「脳血管痙攣」である。
3. 発病原因は長期間の睡眠不足と極度の疲労とに拠る。換言すれば身心の酷使である。
4. 言語は早急に快復し極めて近い将来に正常となる。
5. 当分静養を第一とせられたい。

以上が大体の経過であるが、近来益々御元気で内藤博士のお言葉通りの健康振りを示されている。何れ路郎先生自らお筆をとられることと思うが、いろいろ御心配下さった皆様に対して此の際一応御安心願える報告をなし得る事を心から歓びとするものである。ただ私はこの度の事を私達に与えられた神意として今後充分に御静養して頂く方法を考えねばならないと痛感するものである。

何を選んでいたゞくかは先様におねがいしてタカシマヤの商品券をお贈りするのも心にくい贈物かと存じます

一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です

大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四条
髙島屋

不朽洞会から

▼**常任理事会**—十月二十六日夜七時から、南区中島生々庵居で常任理事会を開催。十二月一日の理事会総会に提案する議案其他に就き協議した。出席者、生々庵、小石、恒明、白柳子、春巣、潮花、没食子、梅里、小松園、水客、栞、多久志諸氏。

★**新会員**——十二月入会

大谷月都氏（大阪市）正会員

潮花氏推薦

本年十月限りで退会　黄瀬木人氏

川柳雑誌社支部　12月の句会

淀川句会
時　5日（木）六時
題　人工衛星・ストーブ・定員・広告
所　東淀川郵便局

阿倍野句会
時　18日（水）六時
題　慰・霊・祭（年中の惜しい投句御持参のこと）
所　旭町二丁目金塚会館

にしなり句会
時　19日（木）六時
題　くせ・社長・お好焼
所　玉出新町通一ノ十一・梅志居

交通局句会
時　18日（水）五時
題　母親・騒ぎ・株主
所　扇橋交通局病院

玉造句会
時　十二月休会（一月十日・初句会）七時
題　雲・犬・羽根
所　宰相山町一四二・西出一栄居

3・3・3句会
時　5日（木）六時
題　長尻・爪・交番所
所　堺市老松町島野工業会議室

みおつくし句会
時　10日（火）六時半
題　よろめき・ごてる
所　大道一ノ二二・天王寺小学校

南海電鉄句会
時　26日（木）六時半
題　親・馬・鹿・野・良・犬・どんじり
所　ナンバ高架下三号室（スケート場東側）

小松句会
時　1日（日）六時半
題　冬服・暖房
所　八日市町・やまき菓子店

高知句会
時　1日（日）正午
題　独り言・風邪・急用・内職
所　追手筋（湖月）階上

下関句会
時　7日（土）五時
題　人工衛星・帯・藤の声・反目・鉛筆・師走の多忙・毛糸・寒・干大根・無言
所　下関鉄道職員会館

倉敷句会
時　8日（日）一時
題　泣落し・痛快・決算・募集
所　慈愛幼稚園

篠山句会
時　8日（日）一時
題　豊年・眼帯・お寺
所　立町池富旅館（関電寮）

米子句会
時　8日（日）一時
題　夕食・音・隣り・広告
所　啓成校裏・小谷節枝居

名古屋句会
時　15日（日）一時
題　希望・年・下駄
所　市外西枇杷島三菱アパート事務所

宇部句会
時　15日（日）一時
題　二次会・振袖・借金
所　東区恩田長沢　津秋六花居

京都句会
時　16日（月）六時
題　夜霧・当る
所　四条縄手・仲源寺

備前句会
時　21日（土）六時
題　マネキン・おしゃべり・湿布・矢印（課題）名曲
所　吉永町福満・浜田久米雄居

広島句会
時　22日（日）一時
題　名残り・標札・看板
所　鷹野橋電停前　徳田屋旅館

弓削支部
時　月末〆切（投句のみ）
題　誤解・画家・威張る・指輪・女学生
所　久米郡久米南町置田直原七面山

大阪・名古屋・伊勢を結ぶ…
近鉄特急
座席指定・ノンストップ
大阪—名古屋　2時間35分
大阪—宇治山田　1時間54分
名古屋—宇治山田　1時間34分

大阪上六発		名古屋発		宇治山田発	
7.40	15.40	8.00	16.00	8.40	16.40
8.40	17.40	9.00	18.00	9.40	18.40
11.40	19.40	12.00	20.00	12.40	20 40
13.40		14.00		14.40	

本社　大阪市天王寺区上本町6
近畿日本鉄道

近鉄で
楽しいお買物！

アベノ・上六
近鉄
アベノ店㊡5131・上大店㊡3131

スマートで
着心地のよい
O.S.Kの
レディメード
株式会社　大坂商店
大阪市東区淀屋町一丁目二番地
電話東(94)1745・5563番

募集

課題吟募集

空堰（廿句以内）長野文庫選
回り道（廿句以内）中村九呂平選
丹前（廿句以内）菊沢小松園選（十二月二十日締切）
駅前（廿句以内）長野井蛙選（一月二十日締切）

毎号募集

近作柳樽（雑詠廿句以内）麻生路郎選
川柳塔（雑詠）北川春巣選　麻生路郎選
文章（評論・研究・感想其他）（毎月二十日締切）

投稿規定

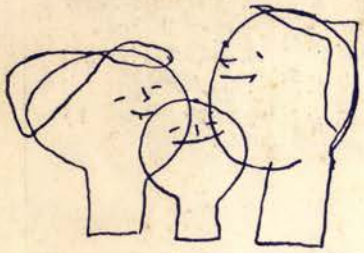
▼投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼『近作柳樽』は一般作家の雑吟を募る。
▼『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼『川柳塔』えの投句は不朽洞会員に限る。

B列5号　毎月一回一日発行
川柳雑誌　第十二巻　第十二号
定価　五〇円（送料四円）
半カ年　三二四円
一カ年　六〇〇円
昭和三十一年十一月廿五日印刷
昭和三十一年十二月一日発行
（載轉禁）
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
編集兼発行印刷人　麻生幸二郎
大阪市住吉区内万代西五丁目二五番地
発行所　川柳雑誌社
電話　大阪㊡六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇

printed in Japan

川柳雑誌 昭和[illegible]年[illegible]月[illegible]日認可
毎月一回一日発行
編集兼発行印刷人 [illegible]生幸二郎
発行所 川柳雑誌社
大阪市住吉区[illegible]万代西五丁目二五番地
電話大阪(6)六〇八一
振替口座大阪七五〇五〇番
定価五十円（郵税四円）

一家そろつてホーライ党



廣東料理

蓬萊

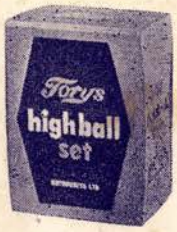
大阪なんば・TEL (64) 551—2

これだけは
ヨソへやるなと
封をきり

喜ばれる贈りもの

トリスハイボールセット

トリス大瓶1本・サントリーソーダ5本・タンブラー2コ付 六〇〇円



洋酒の寿屋

トリス2本入り 1,000円のセットもあり

山葉ピアノが月払いで買えます！

☆ 10回払いと20回払いの2種類です

☆ 1回の月払いの額は4,000円からです

山葉ピアノ

創立70周年 日本楽器

心斎橋店 (75) 5956～9 梅田店 (36) 2783